
僕と幼なじみな新任教師？

まあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と幼なじみな新任教師？

【Zコード】

Z8230X

【作者名】

まあ

【あらすじ】

バカとテストと召喚獣の一次創作小説です。文月学園に1人の教師が赴任しました。新任教師『久島蓮夜』は常識から逸脱している生徒達がそういう文月学園でどんな生活をするんでしょうか？

第一問（前書き）

毎度、おなじみのまあです。

『思いつき』の昇格です。まだやるのかよ。他もあるのにいい加減にしきりよと囁き声も聞こえますが気にしない方向でお願いします。

思ひつからで書いた時と設定が変わつてきます事を『』で承くだねー。

第1問

「久島蓮夜ね。高校は進学校、大学時代に海外留学経験あり?……」

久島蓮夜は文月学園の教師に空きが出たと知り、採用試験の内容を電話で問い合わせたのだがその日に学園に来るようになると言われ、現在は文月学園の学園長室で『藤堂カヲル』学園長の前に立せられている。

(……何か居づらい)

蓮夜は広い学園長室に2人つきりであり、居心地が悪そうにしていると、

「あんた、大学で留学までしておいでどうして教師になろうとなんて思つたんだい? この成績ならあっちで就職先なんていくらでもあつただろ」

「それは、高校時代に恩師とも言える先生に出会えたからです。そんな先生のようになりたいと思いました」

「……今の時代、そんなの流行らないさね」

「そうかも知れません」

学園長は蓮夜の学歴でこの学園の教師を希望する理由がわからないよつて首を傾げると蓮夜は少しだけ照れくさそうに笑い、学園長は蓮夜の言葉にため息を吐ぐが蓮夜の答えが気に入つたようであり、

「採用さね。今日から働いて貰うよ。廊下で待つてな。誰かに案内させむから」

「採用？ 今日から？ へ？」

「何だい？ 何か問題あるのかい？」

「い、いえ、すいません。いきなりすぎて頭が処理できていませんでした。あ、ありがとうございました」

学園長は蓮夜を採用すると笑うと蓮夜は採用試験を受けたその日に同格通知が貰えるとは思つていなかつたようで間の抜けた表情になると学園長は楽しそうに笑い、蓮夜は一度、深呼吸をして自分を落ち着かせると学園長に向かつて深々と頭を下げ、

「そうだ。久島先生、あんたには2年Fクラスの副担任と授業全般を受け持つてもらつからね」

「え？ 担当教科は英語でと言つ話でしたが

「あなたの能力ならできるだろ。それにうちのFクラスは特殊でね。西村先生だけだと人手が足りないんだよ。それがあつての採用試験だしね」

「そうですか。わかりました。それでは失礼します」

学園長は蓮夜にかなりの無茶な条件を言い渡すが蓮夜はあまり気にした様子もなく頭を下げると学園長室を出て行き、

「……まさか、こんなに有能な人材が転がつてるとはね。良い拾い

ものだつたね。能力が履歴書通りだつたら、正規も考えてみようか
ね」

学園長は蓮夜の背中を見送ると蓮夜の第1印象で有能だと判断した
よつとくすりと笑うと、

「……高橋先生、あたしだよ。さつき、採用試験を受けたのを採用
したから、誰か案内を頼むよ。名前は久島蓮夜だよ。履歴書を見る
限りと印象では有能みたいだからね。正規雇用も考へてあるからし
っかりと頼むよ」

「久島蓮夜ですか？」

職員室に内線をかけ、『高橋洋子』教諭に蓮夜の案内を頼むと電話
の先の洋子は蓮夜の名前に何かあるのか首を傾げる。

「ん？ 知りあいかい？ ああ、そう言えば同じ大学だつたね」

「そうですか。あの、久島くんがですか。わかりました」

学園長は洋子の出身大学が蓮夜と同じだと思いましたので学園長
からでた言葉に洋子は蓮夜が自分の知っている人間と同一人物だと
理解したようであり、

「案内の件、わかりました」

「ん。それじゃあ、頼むよ」

学園長は洋子に蓮夜を任せると内線を切る。

第2問

「……学園祭の準備期間なのに野球か」

「懐かしいですか？ 久島くん」

蓮夜は廊下の窓から野球をしている生徒達を見て苦笑いを浮かべると彼の背後から一見えない地味な男性が声をかける。

「ふ、福原先生！？ お久しぶりです」

「はい。久しぶりですね。久島くん……いえ、久島先生と呼ばないといけないでしょつか？」

蓮夜は振り返るとその男性は蓮夜が教師を志すきっかけになつた恩師である『福原慎』教諭であり、慌てて頭を下げると福原教諭はかつての教え子が成長した姿を見る事が出来た事が嬉しいようで柔軟な笑みを浮かべ、

「えーと、福原先生に先生と呼ばれるとなんか恥ずかしいですし、それに俺は臨時職員ですし、長居もできるかはわからないですからなれている方が良いです」

「ダメですよ。久島先生、生徒の目もありますから、学生気分では困ります」

「は、はい！？ つて、洋子先輩？ きょ、教師になつていたんですか！？」

蓮夜は苦笑いを浮かべて『くん』付けで良いと答えようとするがそんな彼の考えを否定する女性の声が背後から聞こえ、慌てて振り返るとそこには大学時代の先輩である洋子が立つており、蓮夜の態度では生徒に示しが付かないと言いたげである。

「はい。久島先生の受け持つ2学年の学年主任をやらせていただいている。Fクラスはいろいろと大変だと思いますがお互いに協力して行きましょう」

「学年主任？ 本当にですか？ その若さで」

「文月学園は生徒に限らず実戦主義ですから、能力のある人が上のポストにつけるんですよ。久島先生も頑張って臨時職員ではなく、正規職員になれるように頑張ってください。学園長先生も期待しているようでしたよ」

「は、はい。尊敬する福原先生や洋子先輩と同じ学校で教鞭を振るつて行けるなら、どんな事でも努力します」

洋子は慌てる蓮夜の様子にくすりと笑うと蓮夜は他の学校ではありえないであろう人事に顔を引きつらせるが福原教諭は蓮夜にも努力をすれば正規の職員にもなれると蓮夜を応援すると蓮夜は大きく頷き、

「久島先生、黄、言っていた尊敬する先生と言つのは福原先生なんですか？」

「はい。福原先生です」

「そうですか」

洋子は蓮夜の様子に以前、彼が話してくれた恩師の事を思い出した
ようで蓮夜が大学時代と変わつていない事に昔を少しだけ懐かしん
でいるのか柔らかい笑みを浮かべると、

「久島先生、学園の案内は私と福原先生で受け持ります」

「よろしくお願ひします」

「はい。それとですね。生徒の日もありますから『先輩』は止める
ように」

「わ、わかりました。高橋先生」

洋子は蓮夜が昔と変わらない事に安心したようすべすべと笑うと
蓮夜は慌てて頭を下げる

「それでは行きましょうか？ 案内が終わつたら西村先生にFクラス
を紹介していただきたいといけないといけないですね」

「はい。よろしくお願ひします……あの、学園長先生も高橋先生も
Fクラスは大変だつて言つてましたけど、何かあるんですか？」

「……久島先生、それはおいおい話をしまじょ」

「高橋先生、視線を逸らされると不安しか感じないんですねけど…？」

福原教諭は蓮夜の案内を済ませようと歩き始めると蓮夜は自分が受け持つ2年Fクラスの話を聞こいつとするが洋子は蓮夜から視線を逸らす。

第3問

「それでは、久島先生、行きましょうか？」

「はい。西村先生、よろしくお願ひします」

学園設備の案内が終わるとFクラスの担任の『西村宗一』教諭に引き継ぎをされてこれから授業を受け持つ事になるFクラスへと向かう事になる。

「久島先生は臨時職員を続けていたと聞きましたが、どうして正規の職員にならないんですか？」

「なかなか、タイミングが合わなくて後は私以上に有能な先生はたくさんいますから……西村先生、さっきも見ていたらなんですが、旧校舎の方は酷いですね」

蓮夜は西村教諭と少し話をしながらFクラスの教室に向かつたが、Fクラスの教室のある旧校舎に足を踏み入れると新校舎との違いに苦笑いを浮かべると、

「まあ、文月^{ウチ}学園のカリキュラムでは仕方のない事なんだが」

「実戦主義ですか。それでも、ここまで酷くなると逆にやる気が失せませんか？」

「……久島先生、文月^{ウチ}学園の生徒はそんな人間ではないんですよ」

「そりなんですか？ それをバネにできる生徒が多いなんて教えが

いがあつたんですね

「……いや、そつちの意味ではないんだ。そつであればどれだけ良いか

西村教諭は召喚システムと言ひ特殊なカリキュラムの影響だと苦笑いを浮かべると蓮夜はこんな環境下でも勉強に取り組む事ができる勤勉な生徒がそろつてゐるのだと考えるが西村教諭は眉間にしわを寄せる。

「そつちの意味ではない？ つて事はどういつ事ですか？」

「まあ、見ればわかる。少し待つていてくれないか？」

「はい。わかりました」

蓮夜が首を傾げた時、Fクラスの教室の前に到着したよつで西村教諭は教室の中から聞こえる騒ぎ声に大きくため息を吐き、

「みんな、清涼祭の出し物は決まつたか？」

「今のところ、候補はこの3つです」

教室のドアを開けると生徒達は清涼祭の話し合いをしてゐるよう少し間の抜けたような男子生徒とポニー・テールの女子生徒を中心には話し合いをしているようで女子生徒は西村教諭に話し合いで出た清涼祭の出し物の候補の3つを見せる。

「……補習の時間を倍にした方が良いかも知れんな」

(あれ？……ひょっとして、明久か？)

西村教諭は黒板に書かれている3つの候補を見て大きく肩を落とすとFクラスの生徒は西村教諭がため息を吐いた理由を『吉井』と言う男子生徒に責任を押し付け始め、蓮夜はその男子生徒に視線を向けると彼の顔に心当たりがあるようで首を傾げた時、

「馬鹿者！！ みつともない言い訳をするな！！ 先生はバカな吉井を選んだこと自体がバカな行動だと言っているんだ！！」

「あ、あの。西村先生、それは言い過ぎじゃないでしょ？？」

西村教諭は生徒達が責任を1人の生徒に押し付けた事を叱りつけるがその言葉はどこかおかしく蓮夜は教室に入ると苦笑いを浮かべて西村教諭を止め、

「あ、あれ？ レン兄？」

「アキ、この人と知り合い？ って言つか、誰？」

男子生徒は蓮夜の顔を見て驚きの表情をすると女子生徒は男子生徒の制服を引っ張り、男子生徒に蓮夜の事を聞く。

第4問

「やつぱり、明久か。大きくなつたな」

「ん？ 久島先生は吉井と知り合いでですか？」

「レン兄、先生ってどう言つ事！？ つて、頭を撫でないで！？
僕はもう小学生じゃないんだから！？」

蓮夜は男子生徒の反応に彼が幼なじみの『吉井明久』だと確信した
ようぐくすりと笑うと彼の頭を撫で、その様子を見て西村教諭は首
を傾げる。

「ん？ 悪いな。どうしても昔の印象つてのは変わらなくてな。西
村先生、明久は俺の幼なじみなんです。明久の両親は共働きですし、
よく家にも遊びに来ていましたので」

「そりなんですか？」

「あのね。印象は変わらないって言つても、レン兄が大学に進学し
てからなんだから、7年も経つんだよ。僕は高校生なんだから」

蓮夜は苦笑いを浮かべると自分と明久が幼なじみだと話し、明久は
変わらない年上の幼なじみの様子に安心しながらも流石に小学生扱
いされている事に大きく肩を落とすと、

「あ、あの。西村先生、そちらの久島先生と言つのは？」

「あれ？ 明久、あの子つて、お前の小学校時代の友達だよな？」

「う、うん。 ただけど」

1人の女子生徒が西村教諭に蓮夜の事を聞き、蓮夜はその女子生徒に何か心当たりがあつたようで明久に女子生徒の事を聞き、明久は頷く。

「そりだよな。 名前は確か……瑞希ちゃん、姫路瑞希ちゃんだ。 明久の……」

「レン兄、 いきなり何を言つんだよ！？」 姫路さんに失礼だ？」

蓮夜は昔の記憶を引っ張り出すと明久は蓮夜の口を塞ぎ、

「なるほど、 そり言つ事か？」

「そ、 そり言つ事つて、 じつ言つ事だよ！？」

「まあ、 気にするな。 兄としては弟がしつかりと成長している姿を嬉しく思つてているだけだ」

「…… 久島先生が吉井と知り合いなのはわかりましたが、 一先ずは生徒達に紹介させて貰います」

蓮夜は明久の様子に一つの答えを導き出したようでくすりと笑うと西村教諭は蓮夜を一先ず、 生徒達に紹介しようと思つたようで蓮夜と明久の間に割つて入ると、

「 今日から俺以外にFクラス専属の教師を置く事になつた。 それがこの先生だ。 久島先生」

「はい。久島蓮夜です。今日から畠さんと一緒にこの学園でお世話を
になる事になりました。今は臨時職員としての採用ですのでも
で君達を受け持てるかはわかりませんがよろしくお願ひします」

西村教諭は蓮夜を生徒達に紹介し、蓮夜は自己紹介をすると生徒達
に向かって深々と頭を下げる。

「久島先生、俺は生徒指導の方もあるので、クラスをお願いします。
このバカどもは目を放すと野球をしたり遊び始めますので」

「あ、そつき、野球をしていたのはこのクラスですか」

西村教諭は蓮夜に生徒達を任せると囁つと蓮夜は苦笑いを浮かべて
頷き、

「ん。そうだった。お前達、クラスの設備の事なんだが、清涼祭の
稼ぎを設備向上に使つても良いと学園長先生から話があつた。だか
ら、少しあは眞面目に取り組むように、それでは久島先生、よろしく
お願ひします」

「はい。わかりました」

西村教諭は学園長から清涼祭の売上を酷い設備の向上に使つても良
いと許可をもらつた事を生徒達に伝えると教室はざわざわと騒ぎは
じめ、西村教諭は眞面目にやる気になつた生徒達の様子を見て一瞬
だけ表情を緩ませるが直ぐに表情を引き締めると蓮夜に生徒達を任
せて教室を出て行く。

第5問

「それじゃあ、俺は見てるから、話し合ひの続きを」

「久島先生、まとめてくれるんぢやないんですか？」

「えーとですね」

蓮夜は窓ぎわに置いて教師用のパイプ椅子に腰をかけようとする
明久と一緒に話し合ひをまとめていた女子生徒が蓮夜に助けて欲し
いのか声をかける。

「島田、島田美波です」

「島田さんだね。すいません。今日、面接を受けていきなりだつた
から生徒の名前も全然でね」

女子生徒は蓮夜が自分の名前を知らない事に首を傾げた後『島田美
波』と名乗ると蓮夜は苦笑いを浮かべ、

「学園祭は生徒のものだからね。教師である俺が口を出すより、み
んなで話し合つて決めた方が思い出に残ると思ってね。暴走しそぎ
ると少し方向を正せて貰うけど、今はちょっと早いかな」

「わうなんですか？」

「ああ。それにこの3つの名前は明久が考えただらつから、仕方な
いとしても3つとも面白こと思つよ」

蓮夜はまだ教師である自分が口を出す事ではないと笑うが、

「ちょっと、レン兄、僕だから仕方ないってどう言つて事！？」

「……なるほど、幼なじみの久島先生がこいつ言つて事は明久は昔からバカだったと言うことか？」

「雄一！？ どう言つて事だ！？」

明久は蓮夜の言葉に声をあげるが一人の大柄の男子生徒のつぶやきに相手を変えたようで男子生徒を怒鳴りつける。

「あ？ そのままに決つてるだろ。バカ久」

「上等だ。表出る。バカ雄一！？」

明久と『雄一』と呼ばれた男子生徒はにらみ合いを始め出そうとするが、

「ケンカはしない」

「「あだ！？」」

蓮夜は持つていたメモ帳で2人の頭を軽く叩くと、

「レ、レン兄、何するんだよ」

「明久、お前は島田さんと一緒に意見をまとめないといけないんだろ。後は」

「……『坂本雄一』」「

蓮夜は2人の様子にため息を吐くと男子生徒はあまり清涼祭の興味無いのか明久とのにらみ合いを邪魔された事につまらなさそうな表情をして名前を名乗る。

「坂本雄一? ……えーと、確か、クラス代表だね」

「ああ」

蓮夜は西村教諭から説明を受けているのか雄一がこのクラスの代表である事を確認すると雄一は小さく頷き、

「そう。とりあえずは落ち着く。今はクラスのみんなに迷惑がかかるから止めなさい」

「……止めるのは今だけなのかよ」

「学生時代の友人とはケンカも必要だからな。いじめや行きましたものじゃない限り、そこまで強くは言わないよ」

蓮夜は明久と雄一に一先ず、ケンカを止めると雄一は蓮夜がケンカ自体は悪い事と思っていないよう眉間にしわを寄せるが蓮夜は気にする事もなく、

「そ、それは放任過ぎないでどうか?」

「でもないと思うよ。ケンカくらいしないと痛さってわからないうだろ。それを知らずに人をナイフで刺しましたとかよりは殴り合いでケンカした方が清々しい」

瑞希は蓮夜の言葉に苦笑いを浮かべるが蓮夜はケンカはした方が良いと言い切り、

「……おい。明久、久島先生って体育会系か？」

「……うん。高校2年の時にケガで引退するまで勉強なんかしないで本気でマンガで無敵の流派を倒すって言つてた。小学校時代から空手で全国常連」

「……」

雄一は蓮夜の言葉に明久に耳打ちをして蓮夜の過去を聞くと明久から聞かされた事実に顔を引きつらせた。

第6問

「それじゃあ、明久、島田さん、続きを頼むよ」

「はい。アキ、あなたも遊んでないで手伝いなさいよ」

「う、うん」

蓮夜は進行を明久と美波に任せると売上でクラス設備をあげる事もできると言つ話に盛り上がり始め、

(……暴走しているな)

その暴走は蓮夜が教室に来る前に決まりかけていた3つの出し物以外にもあがつて行き、蓮夜はその様子に苦笑いを浮かべると、

「レン兄？」

「静かにしなさい。何のために話し合いをしていたんですか」

蓮夜は立ち上がり生徒達に落ち着くように言つが静まる事はなく、蓮夜は明久と美波を少し遠ざけ、

「……お前ら、人の話を聞く気はないのか？」

教卓を蹴り飛ばすと教卓は粉々に吹き飛んでしまい、その様子に生徒達は何があつたかわからないようで息を飲むと、

「良いか。島田さんと明久は君達が選んだ実行委員なんだよな。そ

れなのにその2人を無視して騒ぐなんてビリツリツモリだ?」

「 「 「 …… 「 「 「

蓮夜は落ち着いた様子で生徒達に聞くが蓮夜の背後には何か黒いものが見え隠れしており、その様子に生徒達は驚いているのも重なつているせいが蓮夜の問いに誰も答える事はない。

「坂本代表! ! !

「な、なんですか! ?

蓮夜は生徒達の様子に雄一を呼ぶと雄一は自分が呼ばれるとは全く思つていなかつたようで声を裏返すと、

「……変わりの教卓を取つてきますので、島田さんと明久と一緒にみんなさんの話をまとめておいて下せー」

「お、おひ

蓮夜は苦笑いを浮かべて教室を開けている間の事を雄一に頼み、雄一は代表としての責務も果たしていい事に怒られると思ったようで蓮夜の口から出た言葉に慌てて返事をし、

「それじゃあ、島田さんも明久もようじへ

「は、はい! ?

「……レン兄、やつすぎだよ

蓮夜は教室を出て行くと明久と美波は顔を引きつらせて蓮夜の背中を見送る。

「ぐ、久島先生は怒らせると怖いのじやな

「…………意外」

蓮夜が教室のドアを閉めると同時に教室の中に漂っていたおかしな緊張感は一気に緩み、一見少女とも間違えそうな少年『木下秀吉』と手に持ったデジカメを整備している小柄な少年『土屋康太』の2人が顔を引きつらせながら蓮夜の幼なじみでもある明久に視線を送るとクラスメート達も同じ事を思っているようで視線は明久に集中し、

「な、何？」

「明久、お前が知っている久島先生の情報を話せ

明久は集まる視線に声を裏返すと雄二は明久の肩に手を置いて明久が知りうる蓮夜の情報を全て話すように言うが、

「な、何を言つてるんだよ。そつ言つるのはレン兄に直接聞くのが普通だろ。ほ、僕の口からなんてひ、卑怯じゃないか！－」

「どうか。白状する気はないか？　と言つた、その反応を見ると面白い事が聞けそうだな」

「アキ、何を隠してるの？」

「……吉井くん、私にもわかるように教えていただけませんか？」

明久は蓮夜の事を話すと自分に都合の悪い事もあるせいか、後ずさりを開始するが瑞希と美波の背後にはなぜか真っ黒な氣配が漂い始め、その様子を見て雄一は楽しそうに笑っている。

第7問

「で、何で、久島先生の話をするのをイヤがるんだ?」

「待て! ? 雄二」、この状態はおかしいから! ? まずは僕の足の上に乗せられているこの石を避けるんだ! ?」

明久は対抗虚しくクラスメートに捕まるといつから持ち出して来たかわからない石置の上に正座をさせられるだけではなく、彼の足の上には石が積まれている。

「アキ、別におかしな事を聞いているわけじゃないでしょ。話しさないよ」

「美波、おかしいのは話じやないから、今、僕に起きているこの状況だから! ?」

「なら、白状するか? それなら、石は避けてやる」

美波は明久が蓮夜の事を話す事を嫌がっている意味がわからないとため息を吐くが明久にとつては問題はそこではないと叫び、雄二は蓮夜の情報を話すなら助けてやると笑い、雄二の意見に同調するようクラスメート達は大きく頷く。

「……イヤだ」

「ムツツリー! 、追加だ」

「…………」
〔解〕

明久は意地でも言いたくないのか視線を逸らすと明久の足の上にはもう一枚石が積み上げられ、明久の悲鳴が教室に響くと、

「吉井くん、そんなに久島先生の事を話したくないなんて、2人だけの秘密だなんて、不潔です！！ 酷いです！！」

「ひ、姫路さん、何を言つてるの？ 僕とレン兄でそんな事あるわけが！？」

「……なら、どうして教えてくれないのか、ウチ達に教えてくれないかな？」

瑞希は何かおかしな方向で蓮夜と明久の関係を考えており、明久が全力で否定しようとした時、美波の手により、明久の足の上の石は3枚になっている。

「……明久、幼なじみと言つのはワシらも知つておるのじゃ、簡単なプロフィール喰らいでも良いのではないか？ 年齢とか

「イヤだよ。そんな事を言つても、みんな、根ほり葉ほり聞く気だろ！！ ……せっかく、レン兄が前みたく笑つてくれてゐるのに」

秀吉は明久が意地にならない程度の内容で良いと落とし所を提案するが明久はクラスメート達を信用できないようであり、声を張り上げた後、少しだけ悲しそうに目を伏せると、

「……高校2年の時のケガか？」

「な、何を言つてるんだよ。ぼ、僕はそんな事は何も知らないよ」

「……明久、お前、わかりやす過ぎだ」

雄一は少し前に明久から聞いた蓮夜のケガの事をつぶやくと明久はその言葉に慌てはじめ、雄一は大きく肩を落とし、

「それに関しては俺も聞く気はねえよ。流石にお前の様子を見れば深入りしちゃいけない気がするしな。俺はお前を地獄の底に叩き落したいが、今のところは久島先生には何の恨みもねえしな」

「何だと、それはどういつ事だ！！」

雄一は蓮夜のケガの話には触れないと明久の耳元でつぶやくが明久は雄一の言葉に文句があるようで雄一を怒鳴りつける。

「そのままだ。それより、早くしないと久島先生が帰つてくれるぞ。久島先生がこれを見ると……この石も拳で割れるか？」

「さ、流石にそれはないと思うのじゃ

「…………あの様子じゃ否定できない」

雄一は先ほどの蓮夜の様子を思い出して、今の行動が自分達の首を絞めている事だと気づいたようで顔の血の気が引いて行き、クラスメート達も雄一と同じ答えに行きついたようで顔を引きつらせると、

「誰か、久島先生の足止めに走れ！！」このままじゃ、明久の足の上に乗つている石のように割られる！！全力で証拠を消せ。島田、時間がない。3つから、多數決で決めるぞ」

「わ、わかったわ」

雄一は慌ててクラスメートに指示を出し、蓮夜が戻ってくる前に証拠を隠滅するために動き出す。

第8問

「……で、お前達は何がやりたかったんだ？」

「……誰だよ。姫路を足止めに行かせたのは」

蓮夜は教室に戻つてくると明久への尋問をしていると叫び事実を知つてゐるようで眉間にしわを寄せる雄一は蓮夜の足止めに向かつたのが瑞希だつたため、簡単にばれてしまつたようで大きく肩を落とす。

「す、すいません。吉井くんと久島先生がとっても仲が良さそうでしたので気になってしまいまして」

「すまぬのじや。先ほどの久島先生の自己紹介では明久と久島先生が幼なじみと言つ事しかわからなかつたのじや、それで……」

蓮夜が立腹の様子に瑞希と秀吉は慌てて蓮夜に頭を下げるが他の生徒に反省している様子は見えず、

「……だからと言つてもこの拷問と言つ手段はないだろ。だいたい、こんな拷問器具をどこから持つてきたんだ?」

「や、そりだよ。どうして、僕が拷問を受けないといけないんだよ」

蓮夜は怒りを通り越して呆れているようであり、大きくため息を吐くと明久は拷問を受ける理由はないと叫ぶ。

「それはアキが何かを隠そりとするからでしょ」

「……島田さん、その前に人の秘密を詐索すると云つ非常識な行動を恥じなさい」

「は、はい。反省します」

美波は明久に責任転嫁をしようとする様子に蓮夜は大きくため息を吐き、

「だいたい、俺の事を聞きたいなら、本人に聞きにくるのが礼儀だ。それは周りに不信感を与える事にもなります。今は学生でノリでやつているのかも知れませんが社会に出た後に苦労する事になります。止めなさい。後は坂本代表」

「な、なんですか？」

「君は代表としてクラスをまとめないといけない身ですよね。それが率先するのはどうなんですか？」

蓮夜は雄一を見て雄一に代表としての行動ではないと言つが、

「知らねえよ。俺は明久が地獄に落ちる！？」

「他人の不幸を願うなら、それ相応の不幸が自分にも降りかかると思つよつに」

「雄一」と明久の関係は友人と言うには微妙であり、雄一は明久の事などどうなつても良いと言いかけると蓮夜からはチョークが雄一に向かって投げられると同時に雄一の頬に何かがかすつた感触と後方の壁に何かが当たったような大きな音がし、生徒達が壁の方を振り返

ると壁に小さく焦げたような跡と一粒の欠片すら残す事なく粉々になっているチョークだつたものが畳の上に落ちている。

「な、何だ！？ 今のは！？」

「ただのチョーク投げです。教師とはチョークを投げるものです」

「た、ただのチョーク投げじゃねえよ！？ 威力がおかしいだろ」

チョークがかすつた雄二の頬は小さな擦り傷が付き、血がうつすらと滲みだし、自分に何があつたかわからないようで声を張り上げるが蓮夜は騒ぐ事ではないと言い切り、雄二は本来あり得ないチョーク投げの威力に立ちあがり声をあげて叫ぶと、

「坂本代表、あまり、うるさいと次は本気で額を狙つて投げます」

「……」

蓮夜はこれ以上の威力があると伝えると雄二は身の危険を感じたようで顔を引きつらせて黙り込み、静かに自分の机がわりのミカン箱の後ろに正座をするとクラスメート達も今の蓮夜に逆らつてはいけないと思つたようで静かに席に座る。

第9問

「……レン兄が居れば、僕はFクラスを我がものに」

「明久、おかしな事を考えるなよ。あくまで、今回は周りに問題があつたからであつて、昔から言つてるが、俺はお前の肩を持つだけじゃないからな」

「わ、わかってるよ。当然じゃないか！？」

明久は蓮夜が居れば自分はFクラスではやりたい放題だと考えたようで小さく笑みを浮かべるが蓮夜は明久の考えている事が手に取るようにわかるようだため息を吐ぐと明久は慌てて否定するが、

「……明久」

「すいませんでした！？　おかしな事を考えました！？」

蓮夜は明久の名前を呼ぶと明久は畳の上で土下座をして蓮夜に謝り、

「まったく、それで、坂本代表、島田さん、明久、清涼祭の出し物は決まったのか？」

「は、はい。あのままではまともないと思つたんで、最初の3つから多数決を取つて」

「中華喫茶『ヨーロピアン』か？　……名前は考え直そつな。周りにバカだと思われるから」

蓮夜は清涼祭の出し物はどうなったかと聞くと美波は多数決を取った事を蓮夜に説明し、蓮夜は黒板に書かれた正の字が多い『中華喫茶』を見て名前の変更をするように指示を出す。

「ちょっと、レン兄、バカだと思われるってどうした事だよー!?」

「明久、お前のせいでクラス全体がバカだと思われたらみんながかわいそうだろ」

「何を言つてるんだよー!! このクラスは姫路さん以外、みんなバカだよー!!」

明久は自分が決めた名前では良くないと蓮夜が言うため、声を張り上げるが蓮夜はため息を吐くと明久はこのクラス自体が瑞希を抜かしてバカだと言い切り、

「……あんな。俺が言つのもなんだけどな。明久、お前と同程度のバカはこの世に存在しないんだ。お前が誰かを『バカ』だと言つのは世の中の人すべてに失礼だ。みんなに謝りなさい」

「流石、幼なじみだ。明久のバカを理解してる」

蓮夜は明久の言葉はクラスメート達に失礼だと彼の肩に手を置いて言うと雄二は楽しそうに笑い、

「僕をもつと信じてよー?」

「明久、俺はちゃんとお前を信じてる。どうせ、1人暮らしを始めてから、ゲームやマンガに仕送りを使い込んでまともな生活もしないって、成績だけじゃないんだ。お前のバカさは魂に刻まれたも

のだから

明久は蓮夜の言葉に声をあげるが蓮夜は首を横に振つて明久に『事実』を伝えようとする姿に、

「……本当に久島先生は明久と会つのは7年ぶりなのかのう」

「…………明久の行動パターンを読みきつてる」

「す、凄いです。いつか、私も吉井くんの行動がすべて読み切れるようになりたいです」

蓮夜と明久が本当に幼なじみだと生徒達は理解したようで大きく頷き、

「みんなもその反応は酷いよー…？」

「明久、現実から逃げてはいけないぞ。それにお前は清涼祭の実行委員だろ」「

明久は泣きながら教室を出て行こうとするが蓮夜は明久の首をつかみ、明久を止めると、

「それじゃあ、喫茶店の名前は後で考えるとして、簡単な役割分担を決めよつか？ 島田さんと坂本代表も前に出てきてまとめてくれ

「はい」

「俺もか？ ……面倒だな」

実行委員の明久と美波だけではなく、代表である雄一にも指示を出
すが雄一はあまり清涼祭に興味がないように見える。

第10問

「ん？ 坂本代表はあまり、学園祭に興味がないみたいだな」

「ああ。正直、興味がない。面倒だから、島田と明久に実行委員を押し付けたわけだしな」

蓮夜は雄一の様子に苦笑いを浮かべると雄一は蓮夜の様子から本音を言つても良いことこりだと思つたのか面倒だと言い切り、

「そりが、まあ、やる気がなくてもやつて貰わないと困るんだけどな。思いだしたんだけど、君つて昔は神童つて言われていた坂本雄一だる。今はすいぶんとやる気をなくしているみたいだけど、君が中心になつてくれれば、西村先生が言つていた設備上昇も簡単だろ？ それともそれくらいもできないで神童つて言われてたのかい？」

「ああ。当然だ。やつてやる「じやねえか」

蓮夜は雄一の名前に昔、聞いた噂を思い出して雄一の事を挑発すると雄一は蓮夜の挑発にプライドをくすぐられたのか口元を緩ませると次々とクラスの役割分担を決めて行き、先ほどまでの停滞していたのが嘘のように出し物の名前以外は決まってしまう。

「それじゃあ。後10分は自由時間にしましちよ？

「その前に、久島先生に聞きたい事があるんですけど、もう少しこ、良いよな？」

蓮夜は早く話し合ひが終わった事に残りを自由時間にしようと言つ

が雄一は挑発された事の仕返しと蓮夜の情報を聞き出したいようでニヤリと笑うと、

「別にかまわない。名前は言つ必要はないな。年は24、血液型はA。身長体重は必要ないとして3サイズは必要か？」

「……レン兄、3サイズは聞いても嬉しくないから」

「そりか？『玲』なら、必須だと詰め寄つてくるぞ」

「玲？ その人って久島先生の彼女ですか？」

蓮夜は冗談交じりで自分のプロフィールを話しかめると明久は蓮夜の言葉にため息を吐くが蓮夜は明久の様子を見て苦笑いを浮かべて『玲』と言う名前を出すと瑞希は蓮夜の彼女だと思ったようで遠慮がちに聞くなか、男子生徒達は蓮夜に向けて殺意を上げ始めるが、

「や、止めてよ。姫路さん、おかしな事を言わないで！？ 姉さんとレン兄がそんな関係になつたら、僕はレン兄の幸せを考えて猛反対をするよー！」

「姉さん？ アキ、あんたにお姉さんついていたの？」

明久は自分の姉であり、蓮夜の幼なじみの『吉井玲』を思い出した上で全力で蓮夜と玲の関係を彼女なんかではないと否定し、Fクラスの生徒は誰も明久に姉がいると言う事を知らなかつたようで首を傾げる。

「明久、お前、玲の存在を隠してたのか？」

「そ、そりや、そうだよ。あんな、姉さんがいるなんて知られたら、僕は恥ずかしそぎて生きていけないよー！」

「……明久、いくらなんでも言いすぎだろ」

蓮夜は明久が玲の事を隠しておきたい理由も何となくわかるようで苦笑いを浮かべるが明久の玲へ対する考えは蓮夜の想像をはるかに超えており、蓮夜は大きくため息を吐くと、

「そうすると、久島先生は明久の幼なじみではなく、明久の姉上の幼なじみとなるのじやな」

「まあ、そう言つ事だ。玲が明久にいたずらをして泣いた明久が良く家に逃げ込んできていたぞ」

「……明久、お前の姉って何なんだ？」

「……言わないでよ。泣きたくなつてくるから」

生徒達は蓮夜と明久の関係より、明久の姉である玲の方に興味が移り始めた時、授業終了の鐘が鳴り響き、

「それじゃあ、今日はここまでだな。帰りのH.Rは西村先生が出るのか、ちょっと確認をしてくるから、待機しているように

蓮夜は一度、教室を出て行く。

第11問

「それじゃあ、西村先生、お願ひします」

「ああ」

蓮夜は西村教諭にFクラスのHRを任せると職員室に振り分けられた自分の机に荷物を降ろすと、

(……明久を痛めつけるためにあれだけ協力するんだからな。上手く道筋立てれば良いクラスになると思つんだけどな)

Fクラスを見て感じた事を思い浮かべて苦笑いを浮かべた時、

「久島先生、Fクラスの生徒はどうでしたか?」

蓮夜の様子を見た福原教諭が蓮夜に声をかける。

「福原先生、それがなかなか……昔を思い出しますね」

「久島先生も元気でしたからね」

「いや、元気と言つか……俺は巻き込まれていたと言つのが真実と言つか……ケガで自棄になつていたのも否定できないと言つか」

「それなら、どうして、視線をそらすんですか? 本当は好きでやつてましたよね?」

蓮夜は苦笑いを浮かべて学生時代を思い出すと言つと福原教諭は学

生時代の蓮夜を思い出したようで昔を懐かしむように笑うと蓮夜は友人達に巻き込まれただけだと言うが自分にも後ろめたい事がある。ついで福原教諭から視線を逸らした時、

「ん？ 福原先生は久島先生の事を知っているのですか？」

「はい。久島先生が高校生の時に日本史の授業を受け持っていましたよ。彼も今は落ち着いていますが昔はかなり元気で。屋上からグラウンドまでワイヤーで降りてみたり、巨大な落とし穴を作つて、いじめをしていた生徒を埋めてみたり、学園祭で無許可で花火を打ち上げてみたり、カツラと噂されていた校長の頭が本物か偽物か確認したりと他にもいろいろと」

「……久島先生」

「わ、若かったんですね。もう、そんな事はしません……」

西村教諭は簡単にHRを切り上げてきたようで話していた2人に声をかけると福原教諭は蓮夜が高校時代に行つた騒ぎを話しだし、西村教諭は福原教諭から聞かされる蓮夜の高校時代の出来事に眉間にびくびくと青筋が浮かびだと蓮夜は若さゆえの過ちだと全力で弁明を始め、

「……当然です。おかしな行動は控えてください。あのバカどもがマネをしそうですから、教師としての自覚を持つてお願ひします」

「いや、流石に人に拷問にかけるような危ない事は……してたけど

「……久島先生、あなたは何をしていたんですか？」

西村教諭は蓮夜に教師としての自覚を持つように言うと蓮夜はFクラスの生徒が明久にしていた拷問に何かが引っかかったようで小さな声でつぶやき、その声は西村教諭の耳に届いたようで西村教諭は大きなため息を吐く。

「流石に『冗談です。それより、西村先生、福原先生、授業の事なんですけど、俺は西村教諭の補佐と言う形になるらしいので、今のFクラスの状況をできれば個人での成績を教えてください。個人毎の学習計画も立てて見たいので、福原先生にもご指導をお願いしたいんですが」

「わかつてますよ。私が協力できる事は何でも言つてください」

「そうか。それなら、私の机に来てくれ

「はい」

蓮夜は苦笑いを浮かべながら「冗談だと笑い、彼なりのFクラスの教育計画を立てたいようで西村教諭と福原教諭にFクラスの成績を教えて欲しいと頭を下げるとき西村教諭は蓮夜が気に入ったようで、蓮夜についてくるように言つと、

「久島くんも立派な先生ですね」

福原教諭は教え子である蓮夜の成長が嬉しいようで西村教諭に授業のアドバイス受けている蓮夜の姿を見て優しい笑みを浮かべる。

第1-2問

「……で、2人は何をしたかったわけだ?」

「 「 ……」

蓮夜が職員室でじばらぐ、西村教諭のアドバイスを受けていると明久と雄一がまた騒ぎを起こしたと言う話になり、蓮夜は西村教諭の補佐で2人の捕縛に動きき、雄一は蓮夜から視線を逸らすがすでに明久は蓮夜の前で土下座をしている。

「明久、顔をあげる。お前達は目的があつて『女子更衣室』に忍び込んだんだろ。話は聞く、それで納得がいかなかつたら、根性を叩き直すだけだ。俺は玲と違つておかしな事はしない」

「……怒らない?」

「話を聞いてから考える。後は話をする時はきちんと相手の目を見る」

蓮夜は話をするために明久に頭をあげるように言うと明久は蓮夜から目を逸らすため、蓮夜は明久に状況をしつかりと話すように言うが、

「……久島先生、吉井と坂本を捕まえたのは確かにありがたいんだが、屋上から、ワイヤーで降りての奇襲はどうかと思つんだ」

「……俺もそう思つ」

蓮夜が2人を捕まるに至った過程には問題があつたようで同席していた西村教諭と捕まつた人間である雄一は眉間にしわを寄せる。

「いや、ちょっと、昔の血が騒ぎまして」

「……明久、お前の兄貴は何をしてたんだ?」

「い、いや、僕はあまりおかしな事をしてたとは聞いた事がなかつたんだけど」

蓮夜は苦笑いを浮かべると雄一は明久に蓮夜の過去を聞くが明久も知らない蓮夜の一面だったようで首を横に振ると、

『西村先生、Fクラスの須川と横溝が！…』

「……今度はそっちか、久島先生、ここは任せても良いでしょ？」

「はい。わかりました」

他にもFクラスの生徒が問題を起こしたようで西村教諭は明久が蓮夜に頭が上がらないのを理解したようで蓮夜に2人をさせて生徒指導室を出て行くが、

「……今更だけど、俺、今日は初日なんだけど、こんな事をして良いのか？」

「本当に今更だな」

蓮夜は西村教諭を見送った後に自分に明久や雄一を処罰できるのか

と首をかしげ、雄一はため息を吐く。

「まあ、状況を確認してからだな。この学園はあまり停学とか直接的な処罰は嫌いみたいだしな」

「そうなの？」

「実際、最初の試召戦争の話も聞かせて貰うと実行犯はDクラスだとしても脅迫をしてるわけだからな。周りが納得がしているとは言つても、何もおどがめなしは本来はあり得ない。お前らはバカをやるのも良いけど、もう少し、西村先生や先生達に感謝をしなさい」

蓮夜は西村教諭からのアドバイスで文月学園の特性を理解しているようでも苦笑いを浮かべると2人も昔の自分と同じように直ぐには理解できないがいつか西村教諭達の思いも理解出来ると思ったようだが、

「何で、鉄人なんかに」

「明久」

「う。わかったよ。感謝できるような事があつたらね。と言つ事で、雄一、帰ろうか？」

「そうだな」

明久はまだ蓮夜の言いたい事が理解できないようであり、とりあえず、話を切ると誤魔化して逃げようとする。

「それじゃあ、とりあえず、どう言つ状況で女子更衣室に忍び込む

事になつたか説明して貰おうか？ 逃げよつとしたのは罰を下された
いといけないから、一先ず、正座で良いぞ」

しかし、蓮夜からは逃げきる事はできず、明久と雄一は床に正座を
させられる事になる。

第1-3問

「……なるほど、明久らしいと言えばらしいんだが」

「な、何？」

「……常識で男子生徒が女子更衣室で待ち伏せをするな。そして、逃げ込むな」

蓮夜は明久と雄一から瑞希が転校してしまったかも知れなく、それを防ぐために雄一に協力を仰ごうとした途中で雄一の行動を読んで女子更衣室に入つた事、雄一は幼なじみの少女『霧島翔子』から逃げていた途中で女子更衣室に隠れた事、2つの理由を聞いてため息を吐く。

「で、でも、そうでもしないと雄一を捕まえられないわけだし」

「……久島先生は翔子を何もわかつていいないんだ。あいつに常識は通用しない」

蓮夜がため息を吐く様子に明久はバツが悪そうな表情をする隣で、雄一は眉間にしわを寄せて常識から外れないと翔子からは逃げきれないと言つが、

「坂本代表、1つ聞いても良いか？」

「お、おひ」

「逃げるから、追いかけられたんじゃないのか？」

蓮夜はもう一度、ため息を吐くと雄一が逃げる事に原因があると言
い切る。

「待て。普通に考える。逃げるだら」

「なぜだ？ 幼なじみが一緒に帰らうと言つてきただけだろ。用事
もないなら、一緒に帰るだけで良いわけだろ」

「そんな常識で翔子を測るな！－」

蓮夜は一緒に帰つてやるくらいしてやれば良いと雄一の行動に呆れ
たようだが雄一から見ると一緒に帰る事自体が危険な行為でしかな
いよつて声を張り上げるが、

「坂本代表、良いか。常識外れな幼なじみが自分にしかいないと思
つたら大間違いだ」

「……そうだね」

「おい。明久も久島先生もなんで俺から目を逸らすんだ」

蓮夜と明久は常識で測り知れない幼なじみを持つているのは雄一だ
けではないと言い、雄一は2人の反応に意味がわからないようで眉
間にしわを寄せると、

「坂本代表が霧島さんから距離を取ろうとする理由もわかるが、坂
本代表が割り切つていないので拒絶をするのは間違っていると思う
けどな」

「な、何を言つてゐんだ！？」

「レン兄、雄一、どうかしたの？」

蓮夜は雄一が翔子への恋愛感情を押し込めようとしている事に気づいたようでくすりと笑うと雄一は見透かされた気分になつたようで声を張り上げるが明久は意味がわからぬようで首をかしげる。

「まあ、明久は気にしなくて良い。玲の弟だけあつて鈍さも常識外れだから、同年代の恋愛感は理解できないし、仮に理解できても理解に達するまでの知能がないから説明するだけ無駄だしな」

「ちょっと待つて！？ 明らかに罵倒が混じつてゐるよね！？」

「明久、よくバカにされてるつて氣づいたな。それに氣づけるようになつただけ賢くなつたと言ひつけ」とか

「レン兄、頭を撫でないで！？」

蓮夜は明久には雄一の翔子への想いを理解できないから氣にする必要はない事を伝えるが明久はその言葉に声を上げ、蓮夜は明久の反応に少し驚いたような表情をした後、彼の頭を撫で、

「……明久と久島先生の関係が良くわからないんだが」

雄一は目の前で繰り広げられるコントのような幼なじみのやり取りに頭がついて行かないようで眉間にしわを寄せせる。

第14問

「まあ、とりあえずは2人とも眞面目に清涼祭の準備に参加する事、姫路さんの体調を考えると設備向上は必須なんだ。売上を上げる事」

「だけど、設備の向上はまだしも姫路の転校の問題点は3つだろ」

蓮夜は明久と雄二に罰として清涼祭の準備に力を入れる事を言い渡すが雄二は何か考えているよう眉間にしわを寄せると、

「そうなの？」

「なるほど、元神童は伊達じゃないか」

雄一の様子に明久は首をかしげ、雄二が考えている事に蓮夜も気づいているように苦笑いを浮かべる。

「レン兄、雄二、どう言ひ事?」

「設備向上は必須、だけど、それ以上に姫路さんの体調を考えると旧校舎の老朽化が酷いって事だ」

「後はクラスメートの成績、姫路の両親はレベルの低いクラスメート達ばかりじや成績の向上も考えられないだろ」

明久は残り2つの理由を教えて欲しいと言つと蓮夜と雄二は『設備』、『学習環境』、『クラスメート』だと話す、

「参ったね。問題だらけだ」

「さつ田は姫路と島田が召喚大会で活躍すればさうにかかるだろ。設備は売上しだい」

明久はどうしたら良いのかわからないようで胸の前で手を組み、首を傾げると雄一はさつまどうにかなりそうだが、

「学園環境か……普通に考えると学園がどうにかしないといけないレベルの問題だからな」

「そう言つ事だ」

旧校舎の老朽化だけは生徒ではさつまつもできないため、蓮夜と雄一は頭をかく。

「レン兄、雄一、どうにかできないの？」

「とりあえずは学園長に話してみる必要があるな。それじゃあ、行くか？」

「行くつて学園長室にか？」

蓮夜は学園長に話を聞いて貰う必要性があるため、2人を学園長に会わせようとするが雄一は簡単に学園長があつてくれるとは思っていないためか首を傾げると、

「学生2人じや門前払いもあり得るだろ。それに俺は学園長室に顔を出すようにも言われてるからな。まあ、俺は新任の臨職、たいした力になれないかもしねんだけどな」

「それでも充分だよ」

「ああ。それより、大丈夫なのか。久島先生」

「何がだ？」

蓮夜は自分ではたいした力添えはできないと思つてくれと苦笑いを浮かべる姿に雄一は何かあるのか蓮夜の名前を呼ぶ。

「俺達は学園に文句を付けようとしてるわけだぞ。臨時職員の久島先生は学園長に目を付けられないか？ 下手したら初日でクビとかないとも言えないだろ？」

「ちよ、ちよっと、レン兄、大丈夫なの！？」

「雄一は蓮夜に立場的に大丈夫なのかと聞くと明久は事の重大さに気づいたようで蓮夜に詰めより、

「まあ、大丈夫だろ。いきなりクビは契約を交わしてるし……大丈夫だと思いたい」

「ちょっと、それ、明らかに大事だからね！？ どうするのさ。その年で無職とか！？」

「大丈夫だ。しばらくは食えるくらいの蓄えくらいはあるから

「なら、どうして田を逸らすのさ！？」

蓮夜は心配ないと笑うが明久は蓮夜の事が心配なようであり、声を張り上げると、

「俺は臨時でも新任でも教師なんだ。なら、やる事は決まってるだろ。生徒の事を考えて動くのが教師、それだけだ。俺の事は良いから、行くぞ。教室でお前らを待ってる仲間もいるんだろ。お前らはその道筋を立てないといけないんだからな。ほら、2人とも行くぞ」

「明久、行くぞ。どうなるかわかんない事なら、ここにで悩んで立て仕方ねえ」

蓮夜はそれが教師だと笑い、雄一は蓮夜の言葉にやりにくいと思っているのか頭をかきながら立ち上ると3人で学園長室に向かって歩き出す。

第15問

「誰だい？」

「久島です」

「悪いね。少し待つてくれるかい」

3人は学園長室の前に着き、ドアをノックすると学園長からは少し待つように指示があり、しばらく待つていると、

「……それでは失礼させていただきます」

学園長室では学園長と『竹原教頭』が話をしていたようで竹原教頭がドアを開けて学園長室からでてくる。

「……君が新任の久島先生か？ 私は教頭の竹原です」

「はい。挨拶が遅れて申し訳ありません」

竹原教頭は蓮夜を見るなり、彼の性格なのか蓮夜を『臨時職員』と見下したような目で見るが蓮夜はその視線を気にする事なく頭を下げると、竹原教頭は後ろにいた明久と雄一には何かを言つ事なく歩いて行つてしまつ。

「レン兄……何か、竹原先生、感じ悪くない？」

「ああ。俺達を完全に見下したような顔をしてやがった」

「まあ、プライドが高そつだしな。あんなもんだろ」

明久と雄一は竹原教頭の態度が気に入らないようだが蓮夜は臨時職員で渡り歩いてきているため、気にした様子もなく、

「久島先生、待たせて悪かったね。入ってきな」

「はい。失礼します。明久、坂本代表も行くぞ」

学園長から入室の許可が出たため、蓮夜は2人に声をかけて学園長室に入ると、

「久島先生、後ろの2人は何だい?」

「すいません。ウチのクラスの坂本代表と吉井明久なんですが、学園長先生に直談判したい事があるとの事でしたので」

「……学生風情が直談判ね」

蓮夜は学園長に頭を下げた後、明久と雄一が学園長に話したい事を伝え、学園長は少し考え込むような素振りをする。

「レン兄、大丈夫なの?」

「明久、ちょっと静かにしている」

明久は学園長の様子に蓮夜の腕を小突くが蓮夜は明久に静かにするように言い、

「まあ、話くらいは聞いてやっても良いけど、初日から2年の問題

児を2人、学園長室まで連れてくるなんて、久島先生、あんたは覚悟ができているんだうつね？」

「覚悟？　する必要がありますか？　私は福原先生と高橋先生から学園長先生は教師も能力主義だと聞かされました。この程度でクビにされないとは思っていますが」

「……なるほど、食えない男さね」

学園長は蓮夜を齧るような視線を向けるが蓮夜はにっこりと笑い、学園長はそんな事はしないと言つ様子に学園長は口元を緩ませ、「じゃりども、少し待つてな。先に久島先生との少し話があるからね」

「……わかりました」

学園長は蓮夜との話を先に終わらせるため、明久と雄一に待つているように言い、2人は領くと学園室中央にある来客用のソファーアーに学園長に許可を得る事なく座り、

「……へやじりども、あんたらに常識はないのかい？」

「……2人とも、せめて許可を得てから、座ってくれ」

蓮夜と学園長は2人の行動に大きく肩を落とすが、

「え？　だつて、立つて待つてるのは疲れるよ」

「これくらいは良いだろ。別に減るものでもないんだし」

明久も雄一も自分達の行動が常識だと思っているのか気にする様子はなく、

「……久島先生、悪いね。先にこのへんじやつひもの話を終わらせるよ」

「……すいません。学園長先生」

学園長は2人の態度に先に終わらせてしまおうと思ったようである。

第16問

「却下だね」

雄一が学園長に旧校舎の改修工事を頼むと学園長は少し考えるような素振りをした後に2人の直談判を跳ね返す。

「雄一、このばあをコンクリに詰めて捨ててこよ」

「……明久、もう少し態度には気を使え。まったく、このバカが失礼しました。どうか、理由をお聞かせ願えますか？ ばあ」

「まったくですね。ばあ！？ レ、レン兄！？ 何をするんだよ

「……中身が入っていないから、良い音がするな」

「まつたくさね」

蓮夜は頭を押さえる明久と雄一を気にする事なく、2人の頭には中身が詰まっていないと言い切ると学園長は蓮夜の言葉に苦笑いを浮かべる。

「何すんだよ？」

「坂本代表、明久、納得がいかないのかもしれないけどな。それは

田上の人間に物を尋ねる態度ではない

「雄一は蓮夜を睨みつけるが蓮夜はため息混じりの言葉で2人の態度は良くないともう一度、言い聞かせると、

「学園長先生、理由をお聞かせ願いますか？ 2人も納得していないうえでし、それにFクラスには1人身体の弱い生徒がいまして彼女の体調を考えてしまうと」

「身体が弱い生徒？ ……ああ。姫路瑞希だつたかい？」

「そうです。お願ひです。このままの設備だと姫路さんが転校するかもしだれ！？ レン兄、ポンポン、頭を叩かないでよ！？」

蓮夜は2人が設備向上を願い出た理由を補足すると学園長は瑞希に心当たりがあるようで考えるような素振りをし、その様子に明久はまくしたてるように話しだそうとするが蓮夜は明久の頭をもう一度、メモ帳で叩く。

「本当に良い音がするな」

「だろ」

「ちょっと、レン兄、雄一、それはなんなのさ……」

明久の頭を叩いた時に響いた音に雄一は明久をからかう事に全力を尽くすように切り替えたのか真剣な表情をすると蓮夜は苦笑いを浮かべて答え、明久は2人の反応が不満だと声をあげるが、

「学園長先生も知つての通り、彼女は現在の総合得点は学年で2番

と優秀な生徒ですが身体が弱く、彼女の両親は彼女を心配して転校も視野に入れているそうです」

「やれやれ、久島先生、あんた、本当に食えない男だねえ。生徒の前で良く次から次と学園長であるあたしを『齎して』くるね」

「学園長先生、何を言つてはいるんですか？ その生徒が転校を望んでいな印度です。教師として生徒の力になるのは当たり前ですよ」

蓮夜は学園長に瑞希の優秀さを話し始めると学園長は彼女を引き留めるメリットをはじき出したようで蓮夜の言葉に少しだけ表情を緩ませ、蓮夜をからかおうとするが蓮夜はにこりと笑い、教師として当然の事をしていると返し、

「……雄一、レン兄どばばあは何を話してゐるの？」

「……久島先生、侮れねえじゃねえかよ」

明久は蓮夜が押し気味に話をしている様子を理解していないようで首を傾げる隣りで雄一はいつの間にか学園長を巻き込んでいる蓮夜の様子に面白いくと思つたのか小さく口元を緩ませる。

第17問

「まあ、確かに優秀な生徒が他の学校に流出のは避けたいね。だからと言つて簡単に頷くわけにもいかないね。設備に差を付けるのは文月学園の方針であり、これはスポンサーにも了承を得ている事さ。それを覆すんだ。それに見合つた結果がないとできないね」

「見合つた結果ですか？」

学園長は何か考えがあるようで条件をつけたいようであり、蓮夜は首を傾げると、

「そこのくそじやり、2人、話を聞きな。改修の話は前向きに検討してやるよ。その代わりと言つてはなんだけどね。あたしのお願いを2人に聞いて貰おうかね」

「わかつた。明久を好きにして良いぞ」

「……誰もそんな頭の悪そうな不細工なくそじやりを貰つたって嬉しいな」

学園長は交換条件を明久と雄一に話そつとすると雄一はおかしな事を考えたようで明久を売り渡そうとするが学園長は明久を直ぐに却下し、

「いやちだつて、お前みたいなばばあ、お断りだ！――」

「……明久、坂本代表、頼むから話を聞くつて事を覚えてくれ。話をまつたく進まないから

明久は学園長に向かい叫び、蓮夜は大きくため息を吐く。

「それで、ばばあ。明久の身体が目的じゃないなら、何が目的だ？
悪いが、俺はばばあみたいなのはお断りだぞ」

「あたしだって、あんたみたいなくそじやりはお断りだよ。それに
あたしには田那がいるしね」

「「ばばあ、嘘を吐くな……」」

雄一は明久がダメなら自分の身体が目的かと言い始め、学園長を拒絶するが学園長は話が進まない事に大きく眉間にしわを寄せて2人が目的ではないと言い切るがその言葉を明久と雄一は信じられないよつで大声で叫び、

「……本当に失礼なくそじやりどもだね。あんた達は本当に設備を
上昇させる気はあるのかい？」

「学園長先生、本当に申し訳ありません」

学園長は呆れているよつであり、蓮夜は学生2人の態度に申し訳なれやうに学園長に頭を下げ、

「それで、あんた達は話を聞く気はあるのかい？　ないなら、この
話はなかつた事にするよ」

「聞く、聞きます」

「もつたいぶつてないでさつさと！？　ぽんぽん、ぽんぽんと頭を

叩くんじゃねえよーー！」

「だから、田上の人に対する言葉づかいには気をつけろ」

学園長は明久と雄一に話を聞くつもりはあるのかと確認すると明久は直ぐに返事をするが雄一は態度が大きく、蓮夜にメモ帳で頭を叩かれる。

「まったく、久島先生も初日からこんなくそじやうどもの相手をするのは大変だね」

「まあ、でも、学生は元気なのが一番ですから、勉強ばかりで下を向いているよりは良いと思いますけど」

学園長は蓮夜の様子に苦笑いを浮かべると蓮夜は苦笑いを浮かべて返事をし、

「学園長先生、すいませんが条件をお願いします。明久、坂本代表も話を聞く

「う、うん」

「ああ」

蓮夜はもう一度、学園長に頭を下げると明久と雄一に遊んでないで話を聞くように言い、

「それじゃあ、始めようかね。あんた達は清涼祭で行われる召喚大会を知っているかい？」

学園長は一度、額ぐと明久と雄一に清涼祭で行われる召喚大会の事を聞く。

第18問

「ああ。ウチのクラスにも参加者はいるからな」

「ううかい。それなら、話が早いね。その優勝者に与えられる賞品の一つに如月ハイランドのプレミアムオープンのペアチケットにちよつとおかしな噂があるんだけど、あんた達にそのチケットを回収して貰いたいのさ」

雄一は瑞希と美波が参加するため、召喚大会の事くらいは知っていると頷くと学園長は明久と雄一に召喚大会で優勝するように提案するが、

「ペアチケットだと？」

「坂本代表、どうかしたのか？」

雄一は学園長の提案に何かあるのか顔が血の気が引いて行き真っ青になりだし、蓮夜は雄一の顔を覗き込む。

「ば……学園長、ペアチケットの回収って言つけど」

「ああ。最初に言つておくよ。優勝者に譲つてもうつとかは却下だよ。あんた達2人で優勝するんだ。もちろん、強奪も却下だよ」

「……ちつ

明久は気にする事なく学園長にチケットの回収が目的なら召喚大会に優勝する必要はないと言おうとするが学園長は直ぐに否定し、明

久は舌打ちをするが、

「学園長先生、先ほど、おかしな噂があるとも言つていきましたが、おかしな噂と言つのは」

「ああ。 そうだね。 プレオープンのチケットには如月グループがウエディング体験と言つものを考えているらしくてね」

「ウエディング体験だと？」

蓮夜は雄一の様子も気になるがそれ以上にペアチケットにある噂を聞くと学園長は『ウエディング体験』と言つイベントがあると話し始めるがその言葉に雄一の顔はさらに血の気が引いて行き、

「体験ですよね。 それがおかしな噂につながるとは思えないんですけど」

「普通はね。 だけど、ウチは試験校と言つたで世界中から注目を受けている学校だよ。 そして、如月ハイランドは遊園地の他に」

「……結婚式にも力を入れたいってわけですか？ だとしても無理やり過ぎますね」

蓮夜はあまりおかしな噂は無さそうだと首を傾げるが学園長は補足をして行き、その途中で蓮夜は如月グループの思惑が理解出来たようで大きく肩を落とすと、

「レン兄、何があるの？」

「そのチケットを使って入場すると如月グループが結婚、幸せな家

庭生活をプロデュースしてくれるみたいだ

明久は話が理解できないようで蓮夜に聞き、蓮夜は企業が考える手段ではないと聞いたげに大きなため息を吐き、

「そんなものを賞品にしないでください」

「悪いね。もう無理なのさ。竹原が決めた事とは言え、如月グループは大口スポンサーだから、へそを曲げられても困るしね。結局は生徒達の問題だから目をつぶろうかとも思つたんだけど、この間、ラブレター一つでバカ騒ぎをした奴らもいるだろ。優勝した人間を襲つて無理やり、チケットを奪つて如月ハイランドに拉致、ウェディング体験、結婚じや、生徒がかわいそうだしね」

蓮夜はそんな噂のある怪しいものなら賞品から外す事も視野に入れて欲しいと言つが学園長は首を横に振り、

「それにあんた達Fクラスが召喚大会で優勝できればスポンサー達にも設備の改修工事は話も進めやすいしね」

「だけど、正直、僕と雄一じゃ」

「やつてやる。ばあ、その代わり、今のまおじや、優勝なんて無理だ。俺にいくつか条件を出せ」

学園長は明久と雄一が優勝すれば旧校舎の改修工事はスポンサーからの承諾も考えやすいと話すが明久は優勝できるはずはないと思い苦笑いを浮かべた時、雄一は鬼気迫る表情で学園長の提案を受けると叫ぶ。

第19問

「条件? 何だい? 点数操作とかは却下だからね」

「……ひつ」

「坂本代表、舌打ちは止めなさい」

学園長は雄一の様子に点数操作は問題外だとため息を吐き、雄一は少しは期待していたのか舌打ちをする姿に蓮夜は大きく肩を落とし、

「冗談だ。まあ、多少は期待したけどな」

「それで条件つてのは何だい? 無茶なものは聞けないよ」

雄一はまた蓮夜に頭を叩かれたと思ったのか、1歩引いて苦笑いを浮かべると学園長は改めて雄一に向き合つ。

「条件は2つ。出場者のトーナメント表をいじらせろ。後は対戦科目を俺に決めさせる事」

「……それくらいなら聞いてやつても良いね。わかったよ。それじゃあ、話はこれで終わりだよ。あたしは忙しいんだ。さつさと消えな。ぐそじやりども」

雄一が出した条件を聞いた学園長は条件を飲むと直ぐに明久と雄一を追い出すと、

「……学園長先生、教師は生徒の手本にならなければいけないんで

すから、もう少し言葉づかいを気を付けて頂きたいのですが

「悪いね。あたしは学園長って言つても教師じゃなくて研究者さね。そつ言つのは西村先生達に任せやわ」

蓮夜は学園長の言葉づかいは生徒の教育に良くないとため息を吐くと学園長は蓮夜の助言など聞く気はないよつて苦笑いを浮かべ、

「ばばあにそんな事は期待しねえよ」

「まつたくだね」

「明久、坂本代表！！」

「逃げるぞ。明久」

「了解」

明久と雄二は学園長にはそんなものは期待しないと言い、蓮夜は2人の態度に声を上げると2人は蓮夜から逃げるよつて学園長室を出て行き、

「まつたく、あの2人は……学園長先生、申し訳ありませんでした」

「まあ、良いさね。それで久島先生、一応は就業規則とかを説明しないといけないんだけどね。面倒だから、勝手に読んでくれるかい。あたしは清涼祭も近いから忙しいんだよ」

「はい。わかりました」

蓮夜は2人の態度の悪さに頭を下げるとき、学園長は気にしている様子もなく、蓮夜に就業規則をまとめた冊子を渡し、蓮夜はそれを受け取る。

「それを読んで聞きたい事があつたら、他の先生にでも聞きな。何があるかい？」

「何がですか？ それなら、竹原教頭は何を企んでいるんですか？ そして、学園長先生は明久と坂本代表に『白金の腕輪』を獲らせてどうするつもりですか？」

「……」

学園長は蓮夜も追い出したいようで簡単に終わらせようとすると、蓮夜はこりと笑うと学園長と竹原教頭の様子に何かを感じ取つていふようであり、学園長に向かつて学園長の目的は明久と雄一にもう一つ優勝賞品である白金の腕輪を獲らせる事だと聞くと蓮夜の言葉は学園長の目的の核心を突いていたようで学園長は大きく肩を落とし、

「……いつから氣づいてたんだい？」

「いえ、氣づいていると言つまでは至つていなかつたのでカマをかけさせていただいただけです」

「……本当に食えない男だね」

蓮夜にいつから氣づいて居たのかと確認するが蓮夜は学園長の様子から推測しただけで本当は何も氣づいていないと言い切り、学園長は眉間にしわを寄せた。

第20問

「……白金の腕輪の暴走ですか。それを竹原教頭は利用して文月学園を乗つ取りたいと」

「やう言つ事さね」

蓮夜は学園長から召喚大会の優勝賞品である『白金の腕輪』には重大な欠陥がある事と竹原教頭はそれを世間に暴いて文月学園を乗つ取る事を考えているは聞き、眉間にしわを寄せると、

「……学園長の様子から今更、白金の腕輪を賞品から取り下げる事はできないんですね?」

「ああ。すでにスponサーには新技術として発表してるしね。それを取り下げる^{ウチ}文月学園は信頼をなくす。白金の腕輪のお披露目で暴走しても同じ、八方ふさがりさ」

蓮夜は白金の腕輪を賞品から外す事は考えられないかと聞くが学園長は首を横に振る。

「まあ、そうですね。確かに明久と坂本代表なら暴走する心配はなれそうだ」

「……久島先生は反対しないのかい?」

「現状で言えば反対はできませんよ。まだ、暴走するとは限りませんしね」

蓮夜は勝ち田があると思つてゐるようすべりと笑つと学園長は蓮夜の反応に驚いたような表情をするが、

「最悪の場合は優勝した人間が成績上位者なら、回収するしかありませんし、その場合は仕方ないでしょ」

「確かにね。最悪の場合はそうしようかい。久島先生、あのくそじやり2人の事は頼むよ。くれぐれもあまり成績を上げすぎないようにな」

「いや、坂本代表はまだしも、明久がCクラス程度に上げるのは1週間やそこらじゃ無理ですよ。あいつは生糞のバカですから」

「……あたしが言つのもなんだけど、もう少し言葉を選べないのかい？」

学園長は蓮夜の様子を見て、少しでも明久と雄一の成績を上げて貰おうと思つたようであり、蓮夜は学園長の言葉の意図を読み切り、学園長は蓮夜の口から出でてくる言葉にため息を吐く。

「まあ、口が悪くても態度が大きくとも、俺も学園長先生も『教師』ですから、少なくとも竹原教頭は教師じゃないですからね」

「教師ね。あたしはわざわざ言つたけど科学者だよ」

蓮夜は竹原教頭が文月学園を牛耳るのはあまり喜ばしく思つていないうつであり、学園長は蓮夜の言葉に少しだけ照れくさくなつたのか蓮夜から視線を逸らし、

「わかりました。そうしておきます。ただ、高橋先生や福原先生、

西村先生、他にも今日みた限りでもこここの先生方は生徒のために努力します。それを作ったのは学園長先生ですから、だから、俺は臨時でも「」の職員として学園長先生を信じます」

「やれやれ、よく、そんな恥ずかしい言葉が出てくるね」

蓮夜は自分は教師ではないと云つて学園長の様子にくすりと笑つと学園長は大きく肩を落とすと、

「それじゃあ、あたしもやれる事をしようかね。久島先生、あたしの用件はもう終わりだよ。わざと出て行つてくれるかい?」

「わかりました。失礼します。学園長先生も無理しないでください」

「わかつてゐよ。身体を壊さない程度に頑張るよ」

学園長は白金の腕輪の修理で忙しそうで蓮夜を追いつき、「おう」として蓮夜は学園長の考えが理解出来るよう頭を下げると学園長室を出て行く。

第21問

(さてと、一先ずは就職ができたわけだし、一人でも祝杯をあげますか？)

蓮夜は勤務時間を終えると面接を受けに行つたその日に就職が決まるとは思つていなかつたため、苦笑いを浮かべながら食品とビールを買い込んでいると、

「ん？ 久島先生、夕飯の買い出しつすか？」

「……久島先生？」

雄二が長い黒髪の綺麗な少女と歩いており、蓮夜を見つけて声をかける。

「坂本代表、そうだよ。就職も決まつたわけだし、祝杯をね」

「1人でかよ。ずいぶん寂しいな」

「まあ、いきなりだつたし、週末ならまだしもな……この年になると独り者の友人も少なくなつてな」

雄二は蓮夜の買い物かごのビールを見て、蓮夜をからかうように言うが蓮夜は少しだけ恥ずかしそうに頭をかくと、

「それより、彼女か？ 坂本代表も隅におけないな」

「ち、ちげえよ！？ か、勘違いするなよ。こ、こいつは……」

「……雄一の妻の『霧島翔子』です」

「妻？ まだ、結婚はできない年だから、婚約者か？ 霧島さん、俺は今日からFクラスの担当教師に赴任した久島蓮夜です。よろしく」

蓮夜は話を変えようとしたようで雄一の隣に少女の事を聞くと少女は『霧島翔子』と名乗り、蓮夜は翔子に頭を下げるが、

「ちょ、ちょっと待ってくれ！？ こ、こいつは婚約者でも何でもない。ただの『幼なじみ』だ！！」

「幼なじみから結婚か？ じつへりと愛をばぐくんでいるんだね。俺は応援するよ」

「……久島先生、ありがとうございます」

雄一は翔子を幼なじみだと叫ぶが蓮夜は雄一の中にある感情も感じ取ったようで2人の様子にっこりとほほ笑み、2人を祝福し、翔子は頬を染めて蓮夜に頭を下げる。

「しかし、羨ましいな。こんなにお互いを想いあえる幼なじみがいると言うのは」

「……いや、だから、久島先生、俺の話を聞いて……なあ、久島先生、先生は明久と幼なじみなんだよな？」

「正確に言えば、明久の姉の玲とだな」

蓮夜は翔子の様子に苦笑いを浮かべると雄一は翔子との関係を否定しようとすると、その途中で蓮夜にも幼なじみの女性がいた事を思い出す。

「実は何かあつたとかないのか？」

「玲とか……まあ、その話は置いておこう」

「何だよ。この状況で……」

「雄一は反撃だと聞いたげに蓮夜と玲の話を聞こうとするとき蓮夜は雄二の肩に手を置き、

「……坂本代表、覚えておくんだ。間違つても酒に飲まれるな

「お、おひ。って、何があつたんだ！？ 久島先生！？ お、俺は聞いちやいけない事を聞いたのか！？ って、言うか、そんな事を生徒の前で言うなー！？ 」「この事を明久は知つてゐるのか！？」

「……生徒以前に俺は君達の人生の先輩だ。同じ事になりそうな人間にはしっかりとアドバイスはしないといけない。明久には……まあ、知らない方が幸せな事もあるだろ」

「俺だつて、そんなリアルな話は聞きたくないわ！？」

蓮夜は意味ありげな言葉を雄一に送ると雄一は蓮夜の身に過去に何があつたかを理解したようで慌て、蓮夜はこの先に雄一にはそのような事が必ず起きると死の宣告をする。

「……久島先生、吉井のお姉さんにアドバイスを貰いたいから、連

絡先を教えて欲しい」

「しょ、翔子！？ お前は何を言ひ出すんだー…？」

「……吉井のお姉さんとは話が合ひやつた。きっと、雄一との事で的確なアドバイスが貰える」

「ぐ、久島先生、おかしな事を聞いて悪かつた。俺と翔子は帰る」

「おひ。気を付けて帰るんだぞ」

翔子は蓮夜と雄一の様子に玲に興味を持ったようであり、雄一は身の危険を感じたようで翔子を引っ張つて蓮夜から逃げるよつと去つて行く。

第22問

「どうした？」

「レンくん、面接はどうでしたか？」

蓮夜が夕飯の準備をしていると携帯電話が鳴り、蓮夜はディスプレイに映る『吉井玲』の名前に電話を取ると電話の先からは蓮夜の幼なじみであり、明久の姉である玲が直ぐに蓮夜に声をかけると面接の手こたえを聞き、

「……なぜか、即日採用で仕事をしてきた」

「採用されたんですか？ 良かつたですね」

「まあ、そうだな」

蓮夜は夕飯の準備より、玲との会話を優先しようとガスコンロの火を止めると居間のソファーアに座る。

「それでは久島先生に質問です。新しい勤務先はどうでしたか？」

「ん？ そうだな。昔を思い出した」

「それは毎回、学校を変える度に言つていませんか？ だいたい、私の質問の答えにはなつていません」

「まあ、そりなんだけどな」

玲に返事をすると玲は蓮夜の返事に不満げな声をあげ、蓮夜は電話の先の玲の様子を思い浮かべると、

「そうだ。担当したクラスに明久がいたぞ」

「アキくんがですか？ どうですか？ いつも通り、不細工で甲斐性はなかつたですか？」

「……その言い方は止めろよ」

明久の事を話すが玲の明久の評価は低いようであり、蓮夜は玲の反応に苦笑いを浮かべる。

「それで時差があるからいつもはメールなのに電話をかけてくるなんて何かあつたか？」

「レンくんの声が聞きたくなつただけです」

「ああ。 そりか」

「照れますか？」

「まあ、~~満足~~はしないよ」

蓮夜は玲から電話に彼女に何があったのかと聞くと玲はただ蓮夜の声が聞きたくなつただけだと言い、蓮夜は彼女の言葉に照れたようで首筋をかく。

「そりですか。 満足です」

「そりゃ、良かつた

電話の先から聞こえる嬉しそうな玲の声で蓮夜は敵わないと思つていらうであり、

「忘れてました。レンくんに報告しておかないといけない事がありました」

「報告？ 何だ？」

「3カ月だそうです。レンくんが二ヶ月まで私に会ってきてくれた日のです」

「ちよっと待てー？」

「冗談です。あの時は穴を開け忘れました」

玲は電話の先で子供ができたと言いたいのか意味深に笑うと蓮夜は声をあげるが蓮夜の慌てようには玲の声は少しだけ残念そうである。

「あ、あのな。今の状況でおかしな事を言うな。俺は教師だと買っても臨時教師であつて収入だって安定しないんだぞ。文月にだつていつまでいられるかわからないんだからな。それに挨拶の前に子供ができたら、俺はおじさんとおばさんになんて言えば良いんだ？」

「大丈夫です。お父さんとお母さん、お義父さん、お義母さんにはすでに了承済みです。知らないのはアキくんだけです」

「……悪い。どこのホントでどこからが冗談がまつたくわからない。それほどして明久には秘密なんだ？」

蓮夜は玲の様子にため息を吐くが電話の先の玲はすでに根回しは終わっていると言い、蓮夜は眉間にしわを寄せたが、

「決まります。大好きなお姉ちゃんが大好きなレンくんに手込めにされてると知った時のアキくんの顔を見るのが楽しみだからです」

「…………いや、明久は俺と玲の関係を知つたら本気で俺は考え直すようになれる気がするんだ」

「アキくんに反対されたら考え方直してしまいますか？」

「そんなわけがないだろ」

「はい。レンくんなら、やつを言つてくれると信じました」

玲は蓮夜を試すような事を言つが蓮夜の答えは決まっており、玲は蓮夜の答えに嬉しそうに返事をする。

「…………試すような事は言わないでくれ」

「せっかく、同じ大学まで一緒に留学したのに先生になりたいと言つて、こっちで決まりかけてた就職も蹴つて日本に帰つてしまつたレンくんが悪いんです」

「それに関しては反省してるつで、悪かつたよ。さびしい思いをさせてる」

玲は蓮夜と離れていたのがやうこよつて口を尖らせて蓮夜は苦笑いを浮かべて玲に謝ると、

「やうです。私がどれだけ寂しいかレンくんはわかつていません」

「いや、まあ、何だ……悪い」

蓮夜は玲の「機嫌を取つた」というのが面葉が見つからなつたあべつみよつたつり、

「レンくん、謝られるといし懲しくなります」

「ああ。やうだな」

玲の面葉に蓮夜は気分を切り替えようと息つたよつて一度、深呼吸をするといつてこの距離を埋めるよつてお互いの今の状況を話していく。

第23問

(……変な話を振らなければ良かつた。いや、待て。昨日の話を考えると相手の事は言つていなかつたんだ。久島先生がその酒に飲まれた時の相手が明久の姉貴とは限らないだろ)

雄一は昨日、商店街で聞いてしまつた蓮夜の話におかしな事が頭をよぎつているよう眉間にしわを寄せていると、

「おはよう……あれ？ 雄一、どうかしたの？」

「あ、明久！？ べ、別に何もねえよー！」

登校してきた明久は何かを真剣に考えている雄一を見て違和感を覚えたようで声をかけるが雄一は蓮夜の相手が玲だと思い込んでいるため、声を裏返す。

「そりなの？ また、何かして霧島さんに素敵な腕輪をつけられたんじやないの？」

「……あんな事、2度とあつてたまるか」

明久は雄一の様子に翔子と何かと決め付けたようで机代わりのミカン箱の上にカバンを置くと雄一は翔子に拘束具を付けられ映画館に拉致された時の事を思い出したようで顔を引きつらせると、

「な、なあ。明久、幼なじみが良くくつくつて話は聞くけどよ」

「何？ 自分と霧島さんの事を言つてるの？ そうだね。雄一みた

いな不細工が霧島さんみたいな美人の隣にいるのは許せないよ

「あ？ てめえ、何だと、バカ久」

「あ？ やるのか？ バカ雄一」

雄一は明久が蓮夜と玲の関係の事を知っているのか気になるようだが、明久の言葉が頭にきたようで睨み合いを始めようとするが、

「待つのじゃ、2人とも、雄一、お主は明久に聞きたい事があったのではないか？」

「そうです。落ち着いてください」

2人のやり取りを見ていた秀吉と瑞希が2人を止める。

「そうだな」

「……命拾いしたな。雄一」

「あ？ それはお前だろ」

2人は秀吉と瑞希の言葉に一瞬、ケンカを中断しようとするが簡単に収まるわけではなく、取つ組み合いになりそうになつた時、

「明久、坂本代表、朝からケンカはしない。席に座れ。HRを始めるぞ」

HRの時間になつたようで蓮夜が教室に入つてきて2人を止めるが、

「レン兄、止めないでくれ。僕はこの不細工をグロテスクに殺さないと気がすまな!?」

「……明久」

「……雄一、命拾いしたな。レン兄に免じて今日のといふは引いてやる」

明久は止まる事はなく、雄一につかみかかるうとすると蓮夜の声は少し低くなり、蓮夜の様子に明久は身の危険を感じ取ったようで捨て台詞を吐いて自分の席に座ると雄一も蓮夜の顔を立てようと思つたのか明久に続くように席に座り、

「久島先生、HRは久島先生が担当するんですか?」

「違うよ。基本的には西村先生が行うんだけど、今日は3年生のFクラスの生徒が騒ぎを起こしまして生徒指導室に詰めているので変わりだ」

瑞希は昨日の帰りのHRが西村教諭だったのに蓮夜がきた事に首を傾げると蓮夜は苦笑いを浮かべて今朝の状況を話す、

「それではHRを始めましょう……島田さん、どうかしたかい?」

「あの。久島先生、昨日だけで女子生徒5人から告白されたってホントですか?」

蓮夜はHRを開始しようとすると美波は蓮夜に暴動になりそうな事だが気になるようで蓮夜が女子生徒から告白されたと言つ噂の事実を確かめようとする。

「……正確には7人と船越先生からです。当然、断りました」

『『『殺せ！…………』』』

蓮夜は女子生徒からの告白に困っているようで大きく肩を落とすがそんな蓮夜の様子がもてないFクラス男子の怒りに火を点け、教室から叫び声が上がり始め、

「レン兄、逃げて！……」

「ちょ、お前ら、落ち着け！！ 島田、こんなところでそんな騒ぎになりそうな事を聞くな！！」

「そ、そうね。うかつだつたわ。久島先生、逃げて！？」

明久、雄一、美波の3人はクラスメートの暴走に顔を引きつらせながら蓮夜に逃げるよう叫ぶが、

「落ち着きなさい。HRを始めますよ」

蓮夜は身の危険など感じてないようでFクラスの生徒の様子に大きくため息を吐いており、逃げる様子はない。

第24問

「あ、明久、不味いのじゃ、このままでは久島先生が」

「わ、わかってるよ。レ、レン兄、お願ひだから逃げて！…このままじゃ、レン兄が！？」

明久と秀吉はFクラスの生徒が嫉妬で人を殺せると思つていないのであろう蓮夜に全力で逃げろと叫んだ時、

「へ？」

「まったく、HRを始めると言つているのが聞こえないのか？」

蓮夜はチョークを一本持つと先頭を切つて席から立ち上がり、蓮夜に殺意を向けていた『須川亮』に向けてチョークを投げると蓮夜の手から放れたチョークは亮の額の中心を見事に撃ち抜き、亮の額でチョークは粉々に砕けるばかりか亮はチョークの勢いに負けて後方に吹き飛び、畳に後頭部をぶつけて白目を向き、教室はあり得ない状況に一瞬の静寂が訪れ、蓮夜のため息混じりの声だけが響く。

「お、俺は下手したら、昨日、あれを喰らっていたのか？」

「チョーク投げの威力じゃないのじゃ」

「他にも喰らいたい奴はいるか？　いるなら、一発ずつお見舞いするぞ」

雄一は目の前で起きた白目を向いている亮に顔を引きつりせるが蓮

夜は気にする様子はなく、蓮夜は立ち上がっている生徒達を見てくすりと笑うと生徒達は次々と席に座つて行き、

「あ、あの。久島先生、どうして、チョーク投げなんですか？」

「ん？ 昨日も言つたけど教師はチョーク投げるものだからだ」

「えーと、少し古いと思います」

瑞希は蓮夜がチョークを投げる理由を聞くと蓮夜は質問の意味がわからないようで首を傾げ、瑞希は蓮夜の様子に苦笑いを浮かべ、

「そうか？ 僕の高校の時は騒ぐと福原先生に良く喰らつたんだけどな。まあ、もう、7年も前だから古く感じても仕方ないか。まだ、福原先生の威力には届かないって言つのに、やっぱり、投げる時に手首のスナップを加えて貫通力をあげて威力を増さないといけないな。これじゃいつまでたつてもロッカーに穴を開けられない」

「か、貫通力？ レン兄、ちょ、ちょっと待つてよ！？ チョーク投げに貫通力はいらないから、貫通したら困るからね！？」

蓮夜は瑞希の言葉に高校生時代に福原教諭から喰らつたチョーク投げを思い出しているようで苦笑いを浮かべるが蓮夜の口から出るチョーク投げにはあり得ない破壊力に明久は声をあげ、教室の空気は完全に蓮夜を西村教諭と同等の獣扱いの空気になつてているが、

「待て。明久、問題はそこじゃない！－ 久島先生、今、何先生つて言いましたか？」

「何先生つて、福原先生だよ。最初はお前達の担任だつただろ」

雄二だけは蓮夜の口から出た人物の名前が信じられないようで聞き間違いだと思いたいのか蓮夜に確認するが蓮夜の口から出る名前は文月学園の生徒が知っている福原教諭で間違いないく、

「ちょ、ちょっと待つて。レン兄、僕達の知っている福原先生とレン兄の言っている福原先生って同一人物？」

「明久、何を言つてるんだ？ なんでお前らに知らない先生の話をしないといけないんだ？」

明久は重ならない福原教諭の姿に慌てて声をかけるが蓮夜は眉間にしわを寄せると、

「良いか。お前らが残りの約2年の学生生活を無事に過ごすとして怒らせてはいけないのは西村先生や保健体育の大島先生じゃない。福原先生だけは怒らせるな。これは俺の経験談だ。わかつたら返事」

『『『』』』

蓮夜は真剣な表情で福原教諭だけは怒らせるなど言つと蓮夜の様子に先ほどまで蓮夜に殺意を向けていた生徒達は息を飲んで大きく頷く。

第25問

「それじゃあ、今日からは本格的な清涼祭の準備期間になるからな。ただでさえ、このクラスは準備が遅れてるんだ。間違つても野球とかをするなよ」

HRを終えると生徒達は本格的に清涼祭の準備に動き始めるが、（……基本的にこう言つ事に向いていないんだな）

Fクラスの生徒達は計画性が皆無のようであり、自分勝手に動くだけ作業は一行に進むようには見えず、

「落ち着け。坂本代表、一先ずは掃除から始めよう。明久、お前、掃除は得意だよな？」

「う、うん。家事は昔からしてるから、得意だけどそれがどうかしたの？」

「掃除の指揮はお前が執れ。この設備じや、掃除に手を抜くなよ。坂本代表は島田さんと総指揮。後は調理の方は土屋と須川はしばらぐは隅に寝かせておけ」

蓮夜はバラバラに生徒達が動いているのは効率的にも問題があるため、リーダーを決めるが先ほど蓮夜にチョークを喰らった亮はまだ目を覚ましておらず、蓮夜の言葉に生徒達は亮が作業の邪魔になると判断したようで廊下に放り投げる。

「それじゃあ、始めるぞ。何かあれば言つてくれ。なるべく、対応

するか」

「レン兄、それなら、洗剤が欲しい。流石に洗剤なしじゃ、この教室はキレイにならない」

「ああ。それなら、ちょっと、職員室に行つて借りてくる……おい。お前達はどうして俺から視線を逸らす?」

蓮夜は何か協力できる事はないかと聞くと明久は洗剤は必須だと手を上げ、蓮夜は洗剤を学園の備品だと思っているため、職員室に向かおうとするが文用学園は甘くなく、

「えーと、久島先生、言い辛いんですけど、Fクラスには貸して貰えないと思つわ」

「Fクラスは基本的に必要なものは自分達で用意する事が前提じゃからのつ」

秀吉と美波はFクラスには洗剤などは貸出されないかも知れないと答え、

「そう言つ事か? そう言えば、昨日、学園長先生に貰つた就業規則にもそんなような事が書いてあつたな。それなら、購買か」

「久島先生、購買つてどう言つ事ですか?」

「ん? 必要なんだろ。明久、洗剤に何か注文はあるか?」

蓮夜は状況を理解したようで苦笑いを浮かべると購買に行くよつであり、明久に何か指定はあるかと聞く。

「ないけど、レン兄、良いの？」

「ないと進まないんだろ。それくらいは出す。その代わり、遊ばずに真面目にやるんだぞ」

「う、うん」

明久は蓮夜が自腹で洗剤を買っててくれる事に驚いているようだが蓮夜は気にする事はなく、

「それじゃあ、行ってくるから、坂本代表、島田さん、仕切りはよろしく」

「お、おう」

「はい。わかりました」

蓮夜は雄一と美波にクラスの事を頼むと購買に言ってしまい、

「……ウチ、久島先生がモテる理由がわかつた気がするわ」

「そうですね。頼れるお兄さんみたいで、ちょっと憧れちゃいますね」

美波は蓮夜が初日にも関わらず女子生徒から告白された理由がわかったようであり、瑞希は美波の言葉に頷くが、

(……気にするな。久島先生と明久の姉貴が仮にそういう関係でも俺には関係ないはずだ。久島先生がモテても関係ない)

雄一はどうしても蓮夜と玲の関係が頭をよぎって行くようで大きく首を振つてその考えを振り払つと、

「始めるぞ」

雄一はクラスの指揮を執つて清涼祭の準備を始めて行く。

第26問

「久島先生、こんなところで何をしているんだ？あのバカどもはまた逃げ出したのか？」

「西村先生、違いますよ。ちょっと、買い物です」

「洗剤？」

蓮夜が購買で洗剤や掃除に使えそうな道具を買い込んだりと西村教諭が蓮夜に気づき、声をかけるが蓮夜の手の中にある洗剤に首を傾げる。

「西村先生も知つての通り、Fクラスは飲食店なわけですし、今の状態じゃ、お客様さんは呼べませんから」

「確かにそうだが……久島先生、自腹ですか？」

「まあ、これくらいは出さないと……生徒達に点数取りと思われますかね？」

蓮夜は「冗談を交えながら清涼祭の出し物のために必要だと笑う」と、

「まったく、久島先生、後でのバカどもに差し入れでも買ってやつてくれ」

「西村先生が自分で差し入れをすれば良いじゃないですか？」

「あいつらは俺からの差し入れだと、何か裏があるとか言いかねな

いだろ。それに新任の久島先生が出しているのに俺が出さないとかつこが付かないだろ?」

「ありがとうござります」

西村教諭は財布からお金を取り出して蓮夜に後でFクラスに差し入れをしてやつて欲しいと言うが蓮夜は西村教諭が自分を間に入れる必要性を感じないようで首を傾げるが西村教諭は彼なりの照れ隠しなのか苦笑いを浮かべ、蓮夜は西村先生に頭を下げる差し入れの飲み物と洗剤の会計を済ませて直ぐにお釣りを西村教諭に返す。

「しかし、教師になつてみて思いましたが、自分の時もですが先生つて苦労しますね」

「福原先生にあの後にもう少し話を聞いたんだが、久島先生はずいぶんと福原先生や他の先生にも迷惑をかけていたみたいだな」

「……そんな事はないですよ」

蓮夜は差し入れを一先ずは購買の冷蔵庫に保管して貰うと洗剤を手にしながら、西村教諭と雑談をしながら教室に戻ろうとすると西村教諭は福原教諭から蓮夜の学生時代の話を聞いたようで眉間にしわを寄せると蓮夜は西村教諭から視線を逸らし、

「なら、どうして、視線を逸らすんだ?」

「……いや、どちらかと言えば、自分も行動も生成もFクラスだったためか生活指導の担当の先生は苦手です」

「成績も?」高橋先生から聞いたんだが、大学時代は優秀だつたと

聞いているんだが？」「

西村教諭は蓮夜の口から出た蓮夜の昔の成績に首を傾げると、

「高校時代は部活をやつてゐる間は底辺でしたよ。部活を辞めてからもしばらくは目的もなかつたですし、勉強も嫌いでしたしね」

「なら、どうやつて成績を上げたんですか？」

蓮夜は昔の事を思い出して苦笑いを浮かべると西村教諭は蓮夜にどうやつて成績を上げたのかと聞き、

「福原先生や他の先生がケガで部活を辞めて腐つてた時にいろいろと気にかけてくれまして、それでいろいろと考えさせられました。それで自分も福原先生達のようになれたら良いなって、そんな話を幼なじみにしたら、1から勉強を叩きこまれました」

「そうですか。久島先生にも……久島先生の幼なじみと言つ事は吉井のお姉さんですか？」

「ええ。まあ

「……どうですか」

蓮夜は玲から勉強を教わったと言うと西村教諭は蓮夜が明久と幼なじみだと言う事を思い出して首を傾げるが蓮夜は西村教諭は明久に優秀な姉がいる事が信じられないようで眉間にしわを寄せた。

第27問

「しかし、それだけ優秀な姉がいるのにどうして吉井はあんなに成績が悪いんだ？」

「まあ、それは明久の問題ですから、明久も玲もなんですが集中力は桁外れなんで、本当に勉強をする気になれば直ぐに成績は上がると思うんですが、今はまだその時ではないみたいで、そのうち自分でやろううつて気になりますよ」

西村教諭は明久の成績が底辺な事に首を傾げると蓮夜は苦笑いを浮かべ、

「久島先生もそうだったようにか？」

「そうですね。そのうちイヤでも向きあわないとけなくなりますからね。就職が難しいからどこか大学でもと……他には一緒に大学に行きたいとか青春的な意味で」

「久島先生、青春的な意味はまだしも俺はそんな微妙に後ろ向きな大学受験はどうかと思うんだが……」

「そうですね。でもそれくらいでやっと火が点くって感じですよ。俺の時の友人達もそうでしたしね」

蓮夜は近いうちに明久は真面目に勉強するだろうと笑うが西村教諭は蓮夜の言葉は生徒達のためにならないと思ったようであり、眉間にしわを寄せるが蓮夜は自分の時代もそうだったと笑う。

「まあ。 そうかも知れないが……」

「西村先生、少し待つてください」

「ん？ どうかしましたか！？ 久島先生って、ここは2階です！？」

西村教諭は蓮夜と明久の距離が近すぎる事が気になるようで教師としての距離を考えるように言うが蓮夜は西村教諭の言葉の途中で何かに気づいたようで持っていた洗剤と差し入れのジュースを西村教諭に渡し、廊下の窓からグラウンドに飛び降りようとするべく、

『げっ！？ 久島先生に鉄人まで！？ に、逃げるぞ』

「こりゃ、逃げるなー！ お前達、準備はどうした？ サボるなと言つたばかりだろー！」

西村教諭が蓮夜を止める声にグラウンドでサボっていた4名のFクラスの生徒が声を上げ、蓮夜は逃げないように言うが生徒達はその言葉を聞きいれるつもりもなく、当然、逃げだそうとするが、

「……まつたく、逃げると次は当てるぞ」

『…………すいませんでした！？ 命だけは助けてくださいー！？』

『』

蓮夜はボールペンを素早くポケットから抜き取り生徒達に向かい投げつけるとボールペンは深々とグラウンドに突き刺さり、生徒達はグラウンドに深々と刺さったボールペンに顔を引きつらせながらも、こんな人間離れをしている蓮夜に視線を向けるとは蓮夜は次は小銭

を投げつけるつもりようであり、数枚の硬貨を手に持つて笑っている。その様子に生徒達は先ほどの須川の事もあるためか血の気が引いて行き直ぐに土下座をしてグラウンドに額を押し当てる命乞いを始め、

「ですから、久島先生、窓からグラウンドに出ないでください」

「あ。そうですよね。上履きのままグラウンドに出るのは不味かつたですよね。すいませんでした。以後、気付けてます」

「……いや、俺が言いたいのはその事ではないんだが」

蓮夜は2階の窓からグラウンドに飛び降り、西村教諭は蓮夜の行動に声をあげるが蓮夜は苦笑いを浮かべて西村教諭に頭を下げるが西村教諭は眉間にしわを寄せ、

「西村先生、俺はあの4人を連れて教室に戻りますから、教室の方をお願いします」

「ああ。お前達もあまり久島先生を困らせるんじゃないぞ」

蓮夜は西村教諭にFクラスの事を任せ、西村教諭は大きく肩を落とした後に教室に向かって歩き出し、

「さてと、仲間が一生懸命になつている時に自分だけ楽をしようと言つ。そのふざけた根性を叩き潰してやろうか？ 一先ずはグラウンド50周で良いぞ」

蓮夜は体育会系の血が騒ぎだしたようであり、生徒達に罰を与えると蓮夜の様子に逃げた方が危険だと判断した生徒達は顔を引きつら

せたままグラウンドを走り始める。

第28問

「レン兄、お帰り？」

「久島先生、その4人はどうしたんだ？」

蓮夜がサボった生徒4人を引きずつて教室に戻ると明久と雄一は西村教諭から話を聞いているのか顔を引きつらせるが、

「まったく、たかだか42周で力尽きるなんて最近の子供は軟弱だな」

「……いや、ウチのグラウンドのトラックは一周300メートルだから、12キロ走らされるとそんなもんだろ」

「トラック？ 坂本代表、何を言ひてるんだ？ グラウンドを走る基本は外回りだろ」

蓮夜は生徒の軟弱さにため息を吐くが雄一は蓮夜がおかしいと言いかけるが雄一が思っている以上に蓮夜は体育会系であり、

「……お前ら、サボらないように気を付けるぞ」

雄一の一言にクラスの思いは一つになる。

「それで、他に何か手伝う事はないか？」

「いや、掃除を終えちまつと喫茶店は当口がメインだからな。メニュー決めとかは調理班に任せであるし、これと言つてはないな」

「そうか。確かに大部、進んでいるみたいだしな」

蓮夜は何か手伝う事はないかと聞くが、蓮夜の思つてている以上に雄一の指示は的確なようであり、作業は順調に進んでいるようである。

「特に何もないなら……ん？　どうかしたか？」

「あ、あの。久島先生、私、美波ちゃんと清涼祭の召喚大会に出るんですけど、少しお聞きしてもよろしいでしょうか？」

「勉強か？　かまわないよ」

瑞希は遠慮がちに手をあげると召喚大会の勉強をしたいようであり、蓮夜は瑞希の様子に苦笑いを浮かべると、

「レン兄、今更何だけど、レン兄ってなんの教科を教えるの？」

「あれ？　言つてなかつたか？　一応は英語が担当教科だけどFクラスの担当だから、全部、教えてくれと言われてるぞ」

明久は蓮夜の担当教科を聞いていなかつた事を思い出し、蓮夜は首を傾げた後、全ての教科を教えるように言われていると答へ、

「英語か？　確かにレン兄は姉さんと一緒にアメリカに留学してゐるし、本場だよね」

「おい。明久、今の話はどういつ事だ？」

明久は蓮夜が留学していた事は知つていたようであり、その言葉に

雄一が驚きの声をあげ、

「久島先生って留学していたんですか？」

「ああ」

「へえ。どこの大学ですか？」

「ハーバード」

蓮夜が留学していたと言つた話に瑞希と美波は興味が湧いたようであり、蓮夜にどこの大学に留学していたかと聞くと蓮夜の口からは「冗談だと思つような大学の名前が出ている。

「久島先生、いくらなんでもそれは冗談だつてわかるぜ」

「まあ、冗談だと思つよな。俺も留学を知られた時は冗談だと思つたしな」

「あの。留学って、久島先生が決めたんじゃないんですか？」

雄一は冗談にしては笑えないと言つたが蓮夜も当時の事を思い出した上で苦笑いを浮かべると瑞希は蓮夜の様子に首をかしげ、

「ああ。どう言つ経緯か知らないが、朝、起きたらチケットとバスポートを持たされてな。着のみ着のまま、空港まで引っ張られて、わけがわからぬうちにアメリカに連れて行かれた」

「……どう言つ状況？」

「今更だけどわからん」

蓮夜の言葉は常識から外れ過ぎており、話を聞いていたメンバーは眉間にしわを寄せると、

（……朝、起きたら？ 大学時代に明久の姉貴と久島先生は同棲をしてたのか？ ……いや、だから、余計な事を考えるな）

雄一だけは頭の中でいろいろなものが繋がつて言つてこゐるようであり、顔を弓きつらせる。

第29問

「あ、あの。久島先生」

「何だ？」

瑞希は遠慮がちに蓮夜を呼び、

「あの。朝起きたらと言つてましたけど、久島先生は吉井くんのお姉さんと同棲していたんですね？」

（良く聞いた。姫路、これで俺の疑問が解ける……いや、待て。しかし、久島先生と明久の姉貴がそつぬけたとしたら）

瑞希は蓮夜と玲の関係が気になつたようで少し恥ずかしそうに蓮夜と玲の関係を聞くと雄一は幼なじみが付き合つと言つた話は聞かない方が良い気がするようであり、眉間にしわを寄せると、

「ひ、姫路さん、おかしな事を言わないでよ。レン兄と姉さんが付き合つような事は『絶対』にないよ。そんな事があつたら、僕はおじさんとおばさんに申し訳なさ過ぎて土下座しないといけなくなる！」

「…」

「明久……お前の土下座になんの価値もないからな」

「ちよっと、レン兄、いじでそれを言つのはおかしいからね！？」

「いや。土下座つてそれなりにプライドや地位のある人がやるから意味があるのであって、お前の土下座には価値はないんだ」

「真剣な表情で言わないでよ！？」

明久は蓮夜と玲の関係を本当に何も知らないようであり、そんな事はあり得ないと叫ぶと蓮夜は明久の肩を叩くと真剣な表情で明久をからかい、

（……久島先生と明久の様子からじゃ、まったくわかんねえな。明久は本気で久島先生と姉貴が付き合つのは嫌がってる気もするし、それとも、ウチのクラスの性質上、ここで話したら行けないと思つてるのか？……いや、明久にそんな事を気づかう知能はない）

雄二は2人の様子から事実を見極めようとすると。

「それで、久島先生は吉井くんのお姉さんと同棲していたんですか？」

「姫路さんの質問の回答としては同棲をしていたわけじゃないな。俺も玲も大学の学生寮に入つてたんだけど、割と規則が緩いところだな」

「そりなんですか……」

「何か、残念」

瑞希は明久をからかっている蓮夜にもう一度、聞くと蓮夜は苦笑いを浮かべて同棲はしていないと言い切り、瑞希と美波は年上の蓮夜から聞ける恋愛話に期待していたようで残念そうな表情をするが、

（良し。同棲はしていない。セーフだ）

雄一は雄一は小さくガツツポーズをし、

「なるほどね」

「レン兄、どうかしたの？」

「いや、何もない」

蓮夜は雄一が自分の話を聞いて考えている事が手に取るようになわるようで楽しそうに笑うと明久は蓮夜の様子に首を傾げ、蓮夜は何もないと笑いながらも、

(……坂本代表は霧島さんとの事を俺と重ねてゐるみたいだからな。面白そだから、もう少し遊びぼつ)

自分で雄一をからかう材料を手に入れたようで楽しそうに口元を緩ませる。

「それじゃあ、姫路さん、勉強だつたね。ん。せつかくだ。明久と坂本代表も召喚大会に出るわけだし、一緒にやるか?」

「え? いや、僕は……」

蓮夜は自分の話をここで切ると瑞希に勉強を教えるついでに明久と雄一の勉強も見ると言つと明久は後退を始め出だが、

「……俺もすべてに対応ができないから、坂本代表の質問に答えている間に姫路さんに質問すれば彼女の胸元を覗きたい放題」

「仕方ないな。僕も召喚大会に出るわけだし、少しくらいは勉強をしておくとするよ」

蓮夜は明久の扱い方を心得ており、明久の耳元でささやくと明久は蓮夜の口車に乗せられる。

第30問

「島田さんはドイツからの帰国子女だったね」

「は、はい。それで、問題が読めなくて……」

「ああ。それなら」

蓮夜は美波の質問に少し考えるとドイツ語なのか美波にわかるように説明し始め、

「……明久、久島先生はドイツ語も話せるのか？」

「僕も初めて知ったよ」

雄一は蓮夜の万能さに眉間にしわを寄せると明久も蓮夜がドイツ語を話せる事を初めて知ったため、苦笑いを浮かべると、

「久島先生はどうしてドイツ語を話せるんですか？」

「留学時代にね。語学は基本だし、英語がメインだけど色々と覚えた」

美波は信じられないようで勉強などどうでも良くなつたようで蓮夜に質問をし、蓮夜は苦笑いを浮かべ、

「なんですか？ それなら、言葉を覚えるコツをウチに教えてください」

「コツ？……気合と根性？」

美波は蓮夜に日本語を覚えるためにコツを教えて欲しいと頼むが蓮夜はどこか体育会系であり、

「あの。久島先生、美波ちゃんが教えて欲しいのはそういうのじゃないと思うんですけど」

「言葉なんか無くたってジェスチャーと気合でじうにかかる」

瑞希は蓮夜の言葉に苦笑いを浮かべるが蓮夜は迷う事無く言い切り、
「……久島先生はどこか、Fクラス臭がするんだが、明久、久島先生って本当に頭が良かつたのか？」

「そう言われるとあまり、レン兄が勉強をしてる姿って記憶にない。高校の3年に上がるちょっと前から、姉さんに勉強を教わっていた気はするけど」

雄一は蓮夜の話からところごろに漏れ出るバカな発言に眉間にしわを寄せると明久は当時の蓮夜を思い出して首を傾げる。

「明久、坂本代表、そっちは大丈夫なのか？」

「ああ。俺は問題ない」

「へえ、流石は、神童と称された事はあるな。それに比べて明久はバカだな」

「ちょっと、レン兄！？ 僕のノートを何一つ見てないのに直ぐに

罵倒つてどう言つ事だよー?」

蓮夜は集中していない2人に声をかけ、覗きこんだ雄一のノートを見て感心したように頷くと明久のノートを見る事無く明久を罵倒し、「これなら、来年は霧島さんと同じ、Aクラスになれるんじゃないか?」

「な、何で、翔子の名前が出てくるんだよー?」

明久が叫んでいるのを無視して雄一をからかいに移り、雄一は蓮夜の言葉に驚きの声をあげると、

「違うのか? この間の試召戦争があつて正式に婚約者になつたって聞いたんだけど」

「なつてねえよ!! だいたい、そんなガセネタをどこで聞いたんだよ!! 昨日も言つただろ。俺と翔子は『ただの幼なじみ』であつてそんな事実はねえ!!」

蓮夜は首を傾げながら、明久達が2年生になつて直ぐに行つた文月学園の特殊なカリキュラムである試召戦争の結果を聞いているのかその時に行われた雄一と翔子の約束事の事を話し、雄一はそれをガセネタだと叫ぶが、

「さつき、グラウンドで霧島さんからね。後……坂本代表、それを霧島さんの前で言つたら、教師としてではなく、人間としてぶつ飛ばすぞ。自分の弱さを他人にそれも大切な人になすりつけてはいけない」

「あ、おひ

蓮夜は雄一の言葉に反応したのか田つきが鋭くなり、雄一は蓮夜の様子に気落とされたようで頷いてしまつ。

第31問

「それじゃあ、眞面目にやるか……ん？ まだ、何があるのか？」

「結局、久島先生は留学先で何の勉強をしておつたのじゃ？」

蓮夜は雄一が頷いた事にくすりと笑うと勉強に戻ろうとする5人の様子を見ていた秀吉が蓮夜の留学先での事を聞き、秀吉の質問に教室の生徒達の視線が集中し、

「えーと、一応は保健体育の実技を」

「…………久島先生、詳しい話を聞かせて欲しい」

蓮夜は苦笑いを浮かべて「冗談らしき事を話すと『土屋康太』を中心¹に生徒達が蓮夜の言葉に食いつき、

「言つて置くぞ。お前達の期待しているようなスケベな事じゃないからな。スポーツ力学やリハビリとかの勉強だからな」

蓮夜は生徒達の期待を裏切り、生徒達はその場に膝を付き血涙を流し始め、

「あ、あの。どうして、そんな専門的なものを勉強していたのに先生をしているんですか？」

「そりゃ。それを生かせる仕事があるんじゃないですか？」

瑞希と美波は蓮夜の経験から日本で臨時職員の教師をやっている意

味がわからないと聞くが、

「えーと、明久から聞いているかわからないけど、高校時代は空手をしていたんだけど、そこで練習中にケガをしたんだ。その時は何も考えずにがむしゃらに練習すれば強くなれるとは思ってたんだけど、まあ、ぶっちゃけ、オーバーワークだな。ウチの部活は顧問しかしなくて、同じように根性だ。『気合いだ』ってタイプの先生だった。確かにそういう部分もあるんだけど、やっぱり、それだけじゃないんだ。スポーツに力を入れてるところは科学的なメニューも取り入れてるんだ」

「レン兄……」

蓮夜は当時の事を思い出しているようで少しだけ寂しそうに笑うと明久も蓮夜が腐っていた時の事を思い出したようで目を伏せる。

「勉強をしたのは自分のため、どこかでの時にこう言つ考えができたらつて考える自分を冷静に見るため、後は同じ間違いをして欲しくないからかな？ 指導者になるよりは教師の方が目線が近いと思つたし、生徒達と指導者の間に入る人間が居ればケガをする生徒も減ると思つてさ。まあ、それで前の学校はクビになつたけど」

「クビですか？」

「ああ。臨時職員なのに監督おれの指導方針に文句を言つなつてな」

蓮夜は教師として失敗した人間として他に自分と同じ思いをした人間を増やしたくないために教師になつた部分もあると言うが蓮夜の性格では争いは絶えなかつたようで臨時職員と言う立場の弱い蓮夜はそのために仕事先を転々としていたようであり、

「それって、おかしくない？」

「まあ、おかしいのかも知れないけど、これが現実。指導者にとつて生徒は自分の名前を売るための使い捨ての駒。生徒達のためつて言つけど、ケガをした人間のフォローはしない。まあ、この学校の先生はきちんと考えてくれてるみたいだから、安心したけど、この学校、そのうちスポーツ面でも名前が出てくると思うぞ」

「そうなの？」

美波は蓮夜を追い出した学校が信じられないようで不機嫌そうな表情をすると蓮夜は彼女の性格を好ましく思つてゐるようでくすりと笑つた後、文月学園の部活を取り仕切つてゐる人間は優秀だと言い、明久は蓮夜の言葉に首を傾げると、

「ああ。運動部の顧問の先生は独学だけど勉強もしつかりしてゐし、大島先生を筆頭に保健体育の先生達の知識も半端ない。正直、留学してまで勉強したのに自信をなくすな：って、俺の話は良いんだよ。ほら、続きをやるぞ。他にも勉強教えてほしい奴は集まれ」

蓮夜は文月学園の教師陣のレベルの高さに驚いてゐるようで自分はまだまだだと苦笑いを浮かべると勉強に戻ろうと他にも参加者はいないかと聞くと生徒達は蓮夜の言葉から逃げるように作業に戻つて行く。

第32問

「やう言えば、レン兄って、ビルに住んでるの？ おじさんとおばさんと一緒に住んではないよね？」

「ああ。近くに部屋を借りてるわ」

勉強を始めてしばらくすると明久は飽きてきたようで蓮夜がビルで住んでいるかと聞き、

「一人暮らしですか？」

「……姫路さん、何を聞きたいんだ？」

瑞希は蓮夜の恋愛話を諦めてなかつたようすで、蓮夜が女性と住んでいるのではないかと聞くと蓮夜は大きくため息を吐く。

「えーと、やっぱり、気になるんです」

「ウチも気になります。久島先生は彼女がいるんですか？」

瑞希は苦笑いを浮かべると美波も気になっていたようで前のめり気味に質問をし、

「黙秘権行使する

「どうしてですかー？」

「どうしてよー？」

蓮夜は2人の様子に苦笑いを浮かべると瑞希と美波は声をあげると、

「ん？ 何か、俺だけ搾取されてるみたいだから、それに今は勉強の時間だと言つていいだろ。集中しなさい」

「……なあ、明久、お前は久島先生の学生時代に彼女がいたとか知らないのか？」

蓮夜が瑞希と美波に集中するように言つて近くて雄一は明久を肘で突き、明久に蓮夜に過去に彼女がいなかつたかと聞くが、

「学生時代？ ……記憶にない。レン兄は女友達も多かつたけど、彼女がいるとかは聞いた事がないかな？」

「そうか……役立たずが」

明久は蓮夜が玲と付き合つていた事に本当に気が付いていないようで首を傾げ、明久の様子に雄一は舌打ちをする。

「雄一、役立たずってどういう意味だ！－！」

「あ？ そのままだろ」

「やるのか。バカ雄一！－！」

「あ？ 上等だ。表出る。バカ久！－！」

雄一の舌打ちに2人は睨み合いを始め出し、

「明久、坂本代表、殴り合いなら外でやれ。せつかく、掃除をしたのに埃が舞うだろ」

「……久島先生、止めなくて良いのか?」

蓮夜は2人を止める事なく、秀吉は大きくため息を吐くが、
「青春とは時にぶつかりあうものなんだ。その代わり、半端な決着
は許さないけどな」

「……雄二、争いは良くないよね」

「そうだな」

蓮夜はお互いに精根尽きるまで殴り合えと言い切り、蓮夜の様子に
明久と雄二は下手な事はしない方が良いと思ったようで席に戻ると、

「ん? 行かないのか?」

「あ、当たり前だよ。僕は召喚大会を優勝するために勉強をしない
といけないんだから、ねえ、雄二」

「ああ。当然だ。久島先生、日本史をメインで教えてくれ。明久は
バカだから、何教科も頭には入らないしな」

蓮夜は笑顔で明久と雄二に聞くと2人は蓮夜から被害を受けないよ
うに勉強の話に戻す。

「了解。それじゃあ、戻るぞ」

「久島先生、まだ話は終わってないです

「そりよ。別に減るものじゃないんですから、教えてくれたつて良いじゃないですか！！」

「……雄一とのデータの参考にしたい」

蓮夜は明久と雄一の言葉に頷き、勉強に戻ろうとするが瑞希と美波は納得していないばかりかいつの間に翔子が雄一の隣に陣取つており、

「……増殖しているな」

「しょ、翔子、お前、どこから湧いて出てきた！？」

蓮夜は翔子を加え、戦力を増した女子生徒に大きくため息を吐き、雄一は翔子の登場に驚きの声をあげる。

第33問

「とりあえずは霧島さん、教室に戻りなさい」

「……どうして？」

蓮夜は翔子に教室に戻るように言つたが翔子は蓮夜の言葉の意味がわからないようで首を傾げると、

「久島先生、翔子ちゃんだけ、仲間はずれにするなんてダメです」

「そうよ。霧島さんにだつて聞く権利はあるはずよ」

なぜか瑞希と美波は蓮夜の恋愛話が聞けないと決めつけており、

「……その前に、俺が自分の恋愛話を話す義務はないからな。それに霧島さんはAクラスの代表だろ。それなのにクラスをほつたらかして他のクラスに来てはダメだ。今は清涼祭の準備時間であり、担任と代表の指示で清涼祭の準備をする時間であつて無駄話をする時間ではない」

「……クラスは優子がまとめてくれる。だから、大丈夫」

蓮夜は大きくため息を吐き、翔子に教室に戻るように言つたが翔子は代役を立ててきたため、問題ないと言い切る。

「あのな。そう言つ問題じゃない。霧島さんの責任感の問題だ。自分勝手な事ばかりしているとクラスがまとまらなくなつて後々に困る事になるぞ。代表としてだけではなく、人間として、今、やつて

はいけない事をしている事に『気がつきなさい』

「……でも」

蓮夜は翔子に自分勝手な事はしてはいけないと言つたが、翔子は納得がいかないようであり、蓮夜に何かを言おうとした時、

『霧島さんに意見するなんて許せねえ』

『あの男はやっぱり、八つ裂きにするべきだ』

こちらの様子をうかがつていたFクラスの生徒達は、翔子の全面的な味方をしたいようで、蓮夜に対し殺氣混じりの視線を向け始めるなが、

『もう一度だけ言つた。自分の教室に戻るんだ』

「……イヤです」

蓮夜は生徒達の視線など気にする事なく、少しだけ口調を強めて、翔子に再度、Aクラスの教室に戻れと言つたが、翔子は真っ直ぐに蓮夜を見返し、

『そつか……悪いな。霧島さんをAクラスに戻していくる』

「……放して。雄一、助けて」

蓮夜は翔子の首をつかむと、翔子を引きずつて教室を出て行く。すると、翔子は雄一に助けを求める。

「翔子、言つて置くが久島先生が正しいからな

「何を言つてるんですか。坂本くん、坂本くんは翔子ちゃんを助けるべきです！！」

「そうよ

しかし、雄一は翔子を見捨て、その雄一の行動は瑞希と美波に火を点ける事になり、

「ま、待て。どうして、俺が怒られないといけないんだ！？ て、てめえ、明久、何をする！？」

「何を、決まつてるだろ。僕は貴様のような不細工がこの世に存在しているのが許せないんだ。お前みたいな不細工がよりにもよつて霧島さんの隣にいるなんてゆるせるわけがないだ！！ 今の僕なら嫉妬で貴様を殺せる！！」

「雄一は瑞希と美波に落ち着くように言つているなか、明久の右ストレートが雄一の顔面に向けられ、雄一はその攻撃を何とか交わすと明久は雄一に向かつて吠えるが、

「殺人は犯罪だ。後はお前は人の事を言えるほどの顔じゃないだろ

「何を言つてるんだよ。僕は365度、どの角度から見ても美少年じゃないか！！」

「明久、これを渡すから、やつておけ」

蓮夜は明久を止めると明久に小学1年生向けの算数ドリルを渡し、

「算数ドリル？」

「明久、辛いかも知れないが、お前はそこからやらないと無理だ。
姫路さん、島田さんも遊んでいるヒマがあるなら血溜をしていいなさい」

明久は蓮夜に渡されたドリルの意味がわからぬようで首を傾げる
が明久は彼の肩に手を置いて優しい声で言つ。

第34問

「失礼します」

「……」

蓮夜は翔子をAクラスの教室に連れ戻す過程でFクラスの生徒数名から襲撃に遭うが蓮夜が後れを取るわけもなく、チョークで生徒達を沈めた後、納得がいかなさそつた表情をした翔子の連れてAクラスのドアを開けると、

「代表、どこに行つてたんですか？ 清涼祭も近いですから、勝手にいなくならないで下し」

「優子も落ち着きなよ。代表は坂本くんに会いに行つてたんだろうし……代表、この人、誰？」

翔子の姿を見て2人の女子生徒が駆け寄つてくるが見慣れない蓮夜を見て1人が首を傾げる。

「……吉井のお義兄さん」

「吉井くんのお兄さんがどうして文月学園にいるんですか？ それも代表と一緒に」

「優子、ボクの気のせいかもしれないけど、何かニュアンスが義理のお兄さんって感じじゃなかつた？」

翔子は蓮夜を明久の兄として紹介すると女子生徒2人は状況がつか

めていないようであり、

「えーと、俺は」

「久島先生、こんなところで何をしているんですか？」

「高橋先生、すいません。Fクラスに霧島さんが着ていたんで、Aクラスの準備もあるだろうから連れてきました」

蓮夜は自分の名前を名乗ろうとした時、蓮夜を見つけた洋子が駆け寄つてくるとAクラスの生徒達の視線が蓮夜に集まり、

「久島先生？」

「えーと、昨日から、Fクラス担当で臨時職員として務めさせて貰つてます。久島蓮夜です」

「そりなんですか？ ボクは『工藤愛子』です」

「『木下優子』です」

蓮夜は名前を名乗ると蓮夜の前にいた女子生徒は蓮夜につられてるように名前を名乗る。

「工藤さんと木下さんだね。よろしくお願ひします……木下さん、Fクラスの木下くんの」

「あ、あたしが姉です。愚弟がお世話をなつてます」

蓮夜は優子の顔を見て秀吉との関係を聞くと優子は姉として秀吉の

事を蓮夜に頼み、

「いや、世話をするほど、俺はまだ何もしてないよ。それに木下くんは落ち着いているし、」うちの方が助かってるよ

「や、そうですか」

蓮夜はクラスでは落ち着いた様子の秀吉の顔を思い浮かべて苦笑いを浮かべると優子はほつとしたのか胸をなで下ろすと、

「あ、あの。久島先生、代表が吉井くんのお義兄さんって言つてしましたけど」

「幼なじみだよ」

「……吉井のお姉さんの旦那様」

愛子は翔子のした蓮夜の紹介が気になるようで蓮夜と玲の関係を聞く。しかし、蓮夜は生徒達に言つ事ではないと思っているため、苦笑いを浮かべて玲との事を伏せようとするが翔子の中では蓮夜の口から直接、聞いたわけでもないのに確定事項になつており、

「……霧島さん、他人の言葉を聞きいれると言つ事を覚えよ^{ひと}うな

「……代表」

蓮夜は翔子の様子に大きく肩を落とすと優子は蓮夜と翔子の噛みあわない会話に苦笑いを浮かべるが、

「久島くん、玲ちゃんといつ、別れたんですか？ やはり、遠距離

恋愛は難しかつたんですか？」

「……洋子先輩、空氣を読んでください。生徒に話す事でもないで
しゃべりへ

洋子は蓮夜と玲の関係を知っているようで首を傾げ、蓮夜は眉間に
しわを寄せる。

第35問

「す、すいません。そうでしたね」

「まったく、相変わらずですね……どうした?」

洋子は蓮夜の言葉に慌てて頭を下げる。蓮夜は洋子の様子に苦笑いを浮かべている。蓮夜の洋子の様子に翔子、優子、愛子は何かあるのか蓮夜に視線を向けており、

「あの。久島先生と高橋先生って知り合いなんですか? 先輩って言つてしましましたけど、高橋先生もくん付けで呼んでもましたし」

「……ああ。高橋先生は大学時代の先輩だ。失敗した。気を付けてたつもりだったんだけど氣を抜いちまつたな」

愛子は蓮夜と洋子の関係にも興味があるようであり、蓮夜は呼び慣れていた言葉が出てしまった事に失敗したと言いたげに頭をかくと、

「……高橋先生、久島先生の彼女はどんな人?」

「玲ちゃんですか? ……」

「……ですから、それは生徒に話す必要はないです」

翔子は蓮夜を落とすよりは洋子から情報を聞き出した方が良いと判断した。洋子に玲の事を聞き、洋子は蓮夜が言っているそばから口を滑らすとする。

「えーと、久島先生が吉井くんのお姉さんと付き合つてるのは吉井くんは知つているんですか？」

「いや。明久にはまだ話してないよ。玲が何か明久をからかって遊びたいみたいで秘密にして明久だけには欲しいと言われたからな。後はそう言うのが保護者とかにばれると特定の生徒を脅威しているとか言いだす人間もいるから、秘密にしておきたかったんだ」

優子は明久が蓮夜と玲の関係を知つているのかと聞くと蓮夜は教師として明久と接するためにも秘密にする事は必要であつたと言い、

「久島くん、すいませんでした」

「まあ、これ以上は何も言つつもりはないですよ。その代わり、この話はこれで終わりでお願いします。後は学園内でくん付けは止めてください」

「そ、そりでしたね。すいません」

洋子は蓮夜の言い分は正しいためか申し訳なさそうに肩を落とすと蓮夜は洋子を責めるつもりはないようだため息を吐くと優子と愛子、それ以外にも聞き耳を立てていたAクラスの生徒達は蓮夜の言葉に納得したようであり、ここで蓮夜と玲の話は切り上げようとするが、

「……久島先生、詳しい話を聞かせて欲しい」

「……霧島さん、俺の話を聞いていたか？」

翔子だけは蓮夜と玲の関係を話せと蓮夜に詰めより、蓮夜は眉間にしわを寄せる。

「……私が吉井に話さなければ良い話」

「その前に他人のプライベートに十足で踏み入るうとする非常識さに気づきなさい。無頓着に他人や友人のプライベートに踏み込もうとする友人を失う事になるぞ」

「……」

翔子は明久に話さなければ問題ないと思いこんでおり、蓮夜は翔子を非常識だと言った後、翔子に行動を改めるようと軽く説教をするが翔子は納得がいかなさそうな表情をしているが、

「それじゃあ、俺はそろそろ戻ります。ウチのクラスは見張りがないと遊び始めるんで」

「はい。久島先生、頑張ってくださいね」

蓮夜は翔子の様子に苦笑いを浮かべると洋子に頭を下げてからスクラスの教室に戻つて行く。

第36問

「……坂本代表、何があつたんだ？」

「……一般人に説明がしにくいんだよな」

蓮夜が教室に戻ると教室は真紅に染まり、明久が今にも事切れそうな『土屋康太』を抱きかかえて血涙を流し、彼を『ムツツリー』と呼んでおり、蓮夜は目の前に映る信じられない状況に顔を引きつらせて代表の雄二に状況を聞くと雄二はどう説明して良いのかわからぬよう眉間にしわを寄せる。

「久島先生、雄二、そんな事を言つていい場合ではないのじや！？」

ムツツリーの手当てが先なのじや」

「そうだな。えーと、とりあえずは明久、その体勢はダメだ。鼻血がのどに逆流するから、後は止血だけど……この出血量は不味いよな」

秀吉は状況説明より康太の治療だと叫び、蓮夜は鼻血の応急処置をして行くが出血量が多くすぎるため、眉間にしわを寄せると、

「…………久島先生、俺のカバンの中に輸血パックが」

「…………なんか突っ込みどころが多いが、背に腹は代えられないな。誰か。土屋のカバンを」

「は、はい」

康太は最後の気力で自分のカバンの中に輸血パックがある事を伝え、蓮夜はなぜ、康太が輸血パックを持っているか疑問に思いながらも、瑞希から康太のカバンを受け取ると康太に輸血を開始する。

「……とりあえず、掃除班と土屋の様子を見る人間に分かれてくれ。後は坂本代表、説明を頼む」

「ああ」

蓮夜は康太の鼻血が止まったため、真紅に染まつた教室の掃除を生徒達に指示を出し、雄一に説明を再度求めると雄一は苦笑いを浮かべたまま頷くと康太が鼻血な大量に噴き出した原因を話し始め、

「……ずいぶんと困った体质だな」

「だよな」

康太が『寡黙なる性職者』と呼ばれている事や鼻血を大量に噴き出す事がある事を聞き、眉間にしわを寄せると雄一は蓮夜の言いたい事がわかるようで頷き、

「まあ、起きたものは仕方ないが、土屋くん」

「…………なんだ？」

「スキを狙つて女の子達のスカートを覗こうとしない事、それは正々堂々と本人に見せて下さいと懇願するものだ」

「…………それは聞けない。久島先生はチラリズムの素晴らしさを何もわかつていらない」

蓮夜は今回、康太が鼻血を噴き出した原因が美波に向かつて余計な事を言つた明久に美波がお仕置きで関節技をかけた時の彼女の下着を覗き込んだ事とも聞いたため、彼の行動を間違つてていると言うが康太は蓮夜の言葉には頷けないとフラフラになりながらも立ち上がり、蓮夜の目をしつかりと見て言い返し、

「いや、問題はそこじゃないだろ」

「まつたくなのじゃ」

雄一と秀吉は蓮夜と康太の様子にため息を吐く。

『そつだ。久島先生は何もわかつていない！－俺は土屋を応援するぞ』

『そつだ。頼みこんで見れるものなら、いくらでも土下座をしてやる。それで見せて貰えないから、覗くんじゃねえか！－』

生徒達の大半は康太に同調して叫び始め、

「……良いか。お前ら、それは犯罪だからな」

『つるせえ！－勝ち組みたいなことを言いやがつて、やつぱりあの男は異端者だ。総員、あの男の臓物を我らが異端審問会に奉げるのだ！－』

蓮夜は生徒達の様子に大きくため息を吐く姿に生徒達は怪しげな覆面をかぶり始めるが、

「なるほど、先生方から、Fクラスへの体罰は田をつぶると指示がある理由がわかつたな」

蓮夜は大きく肩を落とした後、教室には1匹の鬼神が舞い降り、覆面を被った生徒達を1人残らずぶつ飛ばし、放課後には校庭の外周を走らされている生徒達の姿があった。

第37問

「……明久、お前、何をしてるんだ？」

「レ、レン兄、何をしてるって、どうしてそんなに平然としてるの？」

蓮夜は夕飯の材料を買い終えて家に帰る途中、先ほどのランニングがきつかったのか明久がふらふらと歩いており、一緒に走っていたにも関わらずに平然としている蓮夜の様子に明久は驚きの声をあげるが、

「ん？ これくらいは余裕だ」

「……レン兄、部活、止めた後も結局、走つてたりしてたの？」

「まあ、体力維持くらいでな。それに運動していた人間が急に運動しなくなるのも身体に悪くてな……明久、ずいぶんと良い音で泣いたな」

蓮夜は別に何ともないと笑った時、明久の腹の虫が盛大に泣き始め、「だ、だつて、あれだけ走つたし。それに……」

「明久、何を隠してる？」

「な、何も隠してないよ」

「なら、目を泳がせるな」

明久は蓮夜に何か隠してあり、蓮夜は大きくため息を吐くと、

「怒らない？」

「内容しだいだ」

明久は蓮夜に怒られると思つて、顔を引きつらせながら聞き返す。

「えーと、仕送りを使いきつて、食費がない」

「そつか。次の仕送りまで何日だ」

「えーと、3週間」

「明久、歯を食いしばれ」

明久は仕送りを使い込んでしまったようだが、使いきるにしてもあまりに早すぎ、蓮夜は笑つてはいるが額には青筋が浮かんでおり、

「ま、待つてよー? 気を付ける。これからは気を付けます」

「……まったく、明久、帰るぞ」

「へ? どう言つ事?」

明久は蓮夜の様子に本氣で怒つている事に気がつき、慌てて頭を下げる蓮夜はため息を吐いた後、明久についてくるように言い、明久は意味がわからないようで首を傾げると、

「今日の夕飯くらい食わせてやる」

「ホ、ホント！？」

「その代わり、今日の事はおじさんとおばさんに報告するからな」

蓮夜はこのまま明久を帰すわけにもいかないため、夕飯を食わせてやると言い、明久は目を輝かせるが蓮夜はこのままでは明久の生活を正すために明久の両親に連絡すると告げる。

「ま、待つて。それはダメだよ。そんなことしたら、僕の自由な生活が」

「……明久、そんなふざけた生活をしていて死んだら、どうするんだ？ 自由を守りたいって言つながら、しつかりとした生活をしないとためだ」

明久は両親に今の生活を教えられたら終わりだと思つてているようで蓮夜に思い直すように言つが蓮夜は明久の意見を跳ねのけた時、

「吉井くんに久島先生？ お買い物ですか？」

「姫路さん？ どうしたの？」

「夕飯の買い物をね。明久とはさつき会つて家で夕飯を食べる事にしたんだ」

瑞希が2人を見つけて駆け寄ってきて、蓮夜はこれから自分の家で明久と夕飯を食べると話す、

「姫路さんも夕飯の買い出しか？」

「は、はい。急にお父さんとお母さんが出かける事になってしまって、それで一人ですし、お料理の練習も兼ねて何か作ろうつかと思いまして」

蓮夜は瑞希は何をしているのかと聞くと彼女は食材を買いに来たと答えるが、

「……明久、何があつたのか？」

「レ、レン兄、姫路さんに料理をさせたらダメだ。姫路さんが死んじゃうよ」

明久は蓮夜の腕を引っ張ると瑞希が自分の料理で死ぬとおかしな事を言い始め、

「……明久、頭、大丈夫か？」

「僕は正気だよ！！ 姫路さんの料理は危険なんだ。だから、何とか彼女が料理をするのを考え直させて」

蓮夜は眉間にしわを寄せるが明久の表情は鬼気迫る感じであり、

「姫路さん、それなら、ウチにくるか？」

「良いんですか？」

「まあ、もう1人くらい増えても変わらないしな」

蓮夜は明久の様子にただ事ではないと思つたようで彼女に料理を考えさせるために瑞希を夕飯に誘つと瑞希は明久と一緒に居れる事が嬉しいのか目を輝かせる。

第38問

「お邪魔します」

「お邪魔します」

「別に誰もいないんだ。気にしなくて良いぞ」

蓮夜が家の力ギを開けると明久と瑞希は遠慮がちに玄関に上がり、

「俺は着替えてくるから、適当にテレビでも見ててくれ」

「う、うん」

「あ、あの。『うとう』になるのは悪いので私が夕飯を作ります」

蓮夜は着替えるために寝室に移動利用すると瑞希自分が夕飯を作ることに同意した、

「ひ、姫路さん、な、何を言つてるんだよ」

「吉井くん、どうしました?」

明久の顔から血の気が引き始めるが瑞希は殺^ヤる気になつていて両手を可愛く握っているが、

「悪いな。俺、キッチンに他の人が入るのはあまり好きじゃないんだ」

「 さうなんですか？」

「 ああ」

蓮夜はあつさりと瑞希の言葉を交わし、瑞希は残念そうな表情をするのとは対照的に明久は安心したのか胸をなで下ろしている。

「 うーん。何を作ろうかな？ カレーでも良いか？」

「 うん。僕は良いよ」

「 は、はい。私も大丈夫ですけど……」

「 あまり辛くない方が良いね」

「 ……はい。お願ひします」

蓮夜は着替えてキッチンに入ると基本的に1人分しか料理を作らない事もあるためか、冷蔵庫の中にある材料を見てカレーに決めると瑞希は辛い物はあまり得意ではないのか申し訳なさそうに視線を逸らし、蓮夜はそんな彼女の様子に苦笑いを浮かべると料理を始めて行き、

「 ん？ そうだ。明久」

「 何？」

「 さつき、母さんに今のお前の状況を連絡したら、朝と夕、ウチで飯を食うように伝えておけと言われてな。朝、寝坊するなよ」

「そ、そんな、悪いよ」

蓮夜は着替えている間に明久の食生活を考えて明久の家と同じマンションに住んでいる両親に連絡していたようで、明久の明日からの朝夕の食事を確保しており、明久は流石に迷惑をかけられないと慌てるが、

「拒否権はなし。それに昔は毎日のようにきてたんだ。気にする間柄でもないだろ」

「だけじゃ」

「悪い」と思つなら、次に仕送りがきた時は考えて使う事

「う、うん」

蓮夜に敵うわけもなく、明久は申し訳なやうに肩を落とす。

「あ、あの。久島先生、吉井くん」

「ん？ 悪いな。俺が明久と話してたら姫路さんはヒマだな。明久、居間に行つてろ」

「う、うん」

瑞希は蓮夜と明久が話をしている姿に居心地の悪さを感じてしまつたようで遠慮がちに声をかけると蓮夜は明久に瑞希の相手をするように言い、明久は居間に移動して行くが、

「レン兄って、帰つてきたら何してるの？」

「ん？ どうかしたか？」

「いや、あまり、やる事もないからな」

明久と瑞希は始めてくる蓮夜の部屋に何を触つて良いのかわからな
いため、周囲を見回しており、

「ああ。そうだな。姫路さん、テレビの横の本棚にある赤いアルバ
ムなんだけど」

「これですか？」

「明久の小さな頃のお風呂の写真が」

「ちよ、ちよっと、レン兄、何でそんなものを持つてるんだよ！？」
姫路さんも何でそのアルバムに手を伸ばすんだよ！？」

蓮夜は何かを思いついたようで瑞希に明久の小さな頃の写真がある
と言つと瑞希は直ぐに手を伸ばすが明久は写真のないよつて驚きの
声を上げ、

「日本に帰つて来る時に玲が俺の部屋に置いておいたみたいでな。
そのまま、持つて帰つてきたんだよ。別に良いだろ。減るわけでも
ないし」

「減るからね！？ 僕の尊厳とかいろいろなものが…？」

蓮夜は明久と瑞希の様子にくすりと笑うが明久はそれどころではな
いようで声をあげる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8230x/>

僕と幼なじみな新任教師？

2011年12月25日20時52分発行